

2 遺 構

報告の対象となる地域が広大なので、遺構の位置表示法等についてあらかじめ触れておくことにしよう。

- * まず、調査地域東部を南北に縦断する掘立柱塀 SA5950 あたりを「馬寮」官衙域の東限とみ、その東側の道路 SF6503 を含む空間は馬寮域外と考える。道路の東側には別な官衙域が想定されるが、西辺のごく一部を調査したのみでその性格については未解明な点が多いため、仮に「馬寮東官衙」と呼んで記述を進める。

馬寮東官衙

- * 個別の遺構の記載にあたっては、調査時の地区割りに準拠して遺構の位置を表示するが、その基本的な構成は以下の通りである。すなわち、おおよそ北半部は6ADC区、南半部は6ADD区にあたり、南端のごく小部分が6ADE区となる。これらの大地区内をさらに水田一枚分程度の大きさの中地区に区分するが、区分法は大地区毎で異なり、6ADC区のはあいは井字状に9中地区に分れる（西北隅には調査が及んでいないので、実際には8区画）。6ADD区の基本はキ字状の6分割であるが、都合でP区の北3分の2ほどが東に張り出し、M区が小さくなっている。このようにして、例えば6ADC-P区といえば西辺の中央やや北寄りの区画を指すことになる（PLAN 2 参照）。

調査地域の区分法

- * 奈良時代から平城宮廃絶後12世紀頃までに構築されたと考えられる遺構として、西面中門（佐伯門 SB3600）、西面大垣（SA1600）の一部をはじめ、宮内の官衙域を画する築地・塀・建物・溝・井戸・土壙などがある。これらのうち、佐伯門およびその周辺の遺構については『平城宮報告IX』において既に報告済みであるが、必要に応じて再度取り上げる。また、平城宮西面大垣に接する西一坊大路についても、ごく小面積について調査したに過ぎないが、馬寮の占地や建物配置の問題と抵触する部分があるので、合わせて報告することにした。

- * 検出した遺構のうち、建物および塀はすべて掘立柱による。したがって、以下の記述においては単に「建物」あるいは「塀」と称することにし、特に掘立柱であることをことわらない。また、建物・塀・溝などの遺構の多くはいわゆる平城方位（内裏北面築地廻廊 SC060 の北雨落溝の東西方位を基準としたもので、この座標系は国土方眼座標第VI座標系の方眼方位に対してN0°07'47"W振れる）に近い方位をとっている。特に振れ等に言及しないばあいはこの平城方位に則っているものと解釈されたい。以下の報告においてN・E・Wを付して示す数値は、基準点 No. 14（国土方眼座標第VI座標系で X=-145,500.22, Y=-18,983.42 の値）を基点（0, 0）にした平城方位での値である。たとえばN100とは基準点 No. 14 から北へ100m, W60とは同じく西へ60mという意味である。

掘 立 柱

方位と基準点

- * 建物規模に関する記述は、「東西」「南北」の全長を実寸法で記し、必要に応じて桁行・梁行・用 語 廂の出および柱間数・尺値を（ ）内述べる方法をとる。「柱穴」・「柱掘形」などの用語については『平城宮報告VII』に、また個々の柱穴の呼称・位置表示については『平城宮報告XI』にしたがう。

- * 主要遺構の記述にあたっては、遺構を可能な限り時期別に区分し、同一時期のものについては原則として官衙区画施設、主要建物、中小建物、塀、井戸、土壙の順に行なう。検出遺構は大きく平城宮造営当初（第I期）、奈良時代初期（第II期）、奈良時代中頃（第III期）、奈良時代末

記述の順序

期(第IV期)、平城上皇時代(第V期)および宮廃絶後(第VI期)の6時期に区分できるが(第II・III期についてはさらに細分可能であり、また一部の建物等は複数期にわたって存続したと思われる)、時期区分の根拠等については後にまとめて提示する。しかしながら、重複する遺構も出土遺物もないため時期を決定し難い遺構も少なくない。特に小規模建物にその傾向が強い。これらについては「その他の遺構」として宮廃絶後のものと一括して報告する。¹⁾ *

A 第I期(平城宮造営当初)の遺構

宮の造営にあたり、土地造成に伴う排水路の掘削や官衙区画等を設置するための基準線の設定および仮設的な閉塞施設の構築などが行われた時期である。まだ官衙建物等は完成していない。主な遺構として溝2、塀2がある。

SD6980 (PLAN 17・21・26; PL 36) 6ADE-A・B・K区 *

馬寮地域南端にある素掘り東西溝で、幅1.7~2.0m、深さ60cmある。東端は調査範囲外へ延び、西端は未確認であるが、延長85mにわたって検出した。このSD6980は、佐伯門SB3600の基壇掘込地業の規模から求めた門基壇南北中軸線の東延長線上にほぼ乗る。年代を決める手懸りとなるような遺物は出土しなかったが、地山面に掘り込まれていること、宮内道路の路面の一部とみられる小礫敷SX7000がSD6980を埋戻した後に設けられていること、また調査地域東南で検出した馬寮東官衙南半部の西限をなすと思われる南北溝SD5960(第II期)よりも古いことから、宮造営にかかる地割溝の可能性が強い。ただし、佐伯門の基壇掘込地業との古新関係については未確認である。

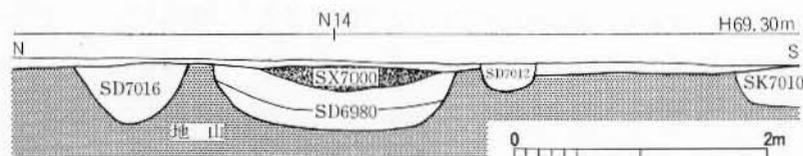


Fig. 13 SX7000とSD6980の関係

SA3680 (PLAN 12・13・22・23・25・26; PL 16・25・33・34) *

6ADC-O・P, 6ADD-O・P・Q区 *

長大な塀 馬寮地域西端近くを南北に縦断する長大な南北塀である。南端は佐伯門SB3600の基壇東北付近から始まり、北端は調査範囲外へ延びるため未確認であるが、延長211m(80間)以上に及ぶ。柱掘形は概して不整形であるが一辺1.2m以上と大きく、深さは50cmほどの浅いものが多い。柱がすべて抜き取られているため柱間寸法は不明確であるが、等間とはならず9尺を標準に前後若干のばらつきがあったと考えられる。多数の遺構と重複し、切り合い関係ではいずれよりも古い。なお、第25次調査で検出した南北塀SA3590とは、佐伯門に対して南北に振り分けの形をとって一直線上に並ぶ。門の位置だけは開くのである。

SA3680については、従来奈良時代初期における馬寮官衙域の西限をなす塀と考えられてき

1) 模式図の記号 ●柱根をとどめる掘形 ●柱痕跡をとどめる掘形 ○抜き痕跡あり ○掘立柱掘形
……推定(すべて方位は上が北、縮尺約600分の1)

たが、第Ⅱ期の建物配置計画線上には乗らず、しかも第Ⅱ期の土壌SK6350より古いため、西面大垣が完成するまでの仮設的な遮閉施設と解釈する方が妥当である。柱間が不定であり、またすべての柱が抜き取られている点も消極的ながら傍証となる。

仮設の遮閉
施設

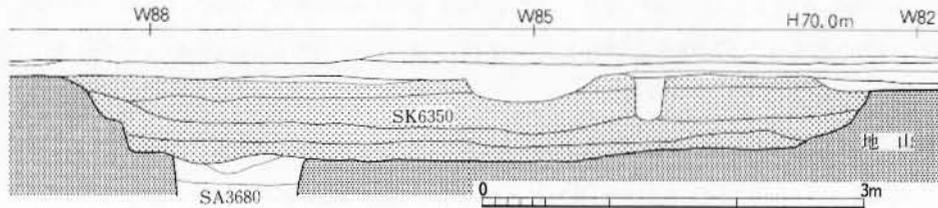


Fig. 14 SK6350 と SA3680 の関係

SA6315 (PLAN 22; PL 25) 6ADD-O区

- * SA3680の南端から47間目の柱穴と柱筋を揃え、その西方に延びる東西塀である。2間分検出、柱間は10尺である。SA3680との間は13尺と広く、これに取り付いたものとは思われない。位置は佐伯門と西面北門推定位置との中間より4.2mほど北にある。性格は不明であるが、大垣造営の際の工区割りのような施設であろうか。柱穴内から軒平瓦6664F型式が出土している。

SD6488 (PLAN 3) 6ADC-G区

- * 馬寮東官衙城北端近くを東西に走る素掘り溝である。幅約60cm、深さ25cmほどで、西端は馬寮東限付近にあり、東は調査範囲外へ延びる。この間の長さ24mを検出したが出土遺物はなく、性格は不明である。馬寮東官衙の西面築地SA6150やその両落溝SD6151・6152よりも先行して地山面に掘り込まれている。南の地割溝SD6980から北257.6mの位置にあたり、尺値に直すと870尺(1尺=0.296mとして)となる。

B 第Ⅱ期(奈良時代初期)の遺構

- * 官衙としての体裁がはじめて整った時期で、遺構としては、西面大垣SA1600、佐伯門SB3600のほか、建物7、宮内道路1、溝3などがある。南北二面廂付東西棟建物SB6450はこの時期の正殿と考えられる建物で、他の建物等はこれを基準に整然と配置されている。ただし、宮造営当初に構築された仮設の南北塀SA3680は一時併存したらしく、建物配置は全体に東に寄っている。この時期、馬寮官衙域の北・東・南を区画すべき築地ないし塀等の遺構は検出されていない。南と北については宮城門を入れて直ぐのところでもあり、何らかの遮閉施設があったはずである。すべて削平されてしまったものと考えざるを得ないが、なお検討を要する問題である。また、井戸が一つも検出されていない点も不可思議なところである。

馬寮東官衙地域では南半部にのみ溝を巡らした区画ができる。

* **SX7000** (PLAN 21; PL 36) 6ADE-B区

- * 馬寮地域南端中央で検出した礫敷面で、東西溝SD6980を埋め戻した後の整地土上面に小礫を敷きつめてある。南北両縁は各々旧水田床土直下に掘られた年代の新しい2条の東西溝によって失われているが、長さ約9m、幅1.5mにわたって東西方向に分布する。部分的にししか遺存していないため断定はできないが、佐伯門の南北中軸線上にあたるので、門から東へ展開する宮内道路の路面であろう (Fig. 13 参照)。

宮内道路

SD7013 (PLAN 21; PL 36) 6ADE-B区

SX7000の北約3mのところを並行する素掘り東西溝である。幅50cm、深さ25cmほどであるが、SX7000同様部分的に遺存するに過ぎない。年代を決定するに足る遺物は出土しなかったが、SD6980と同じく地山面に掘り込まれ、埋土も互いに類似するため、両者の時期はさほど隔らないであろう。SX7000と併存した可能性が強く、両者の位置関係からみて佐伯門東の宮内道路の北側溝と考えられよう。

SD5960 (PLAN 14・15・16・17; PL 21・26・36・37)

6ADC-K, 6ADD-L・M・N・O・P, 6ADE-A区

馬寮東官衙南半部の西を画する素掘り南北溝で、幅3~4m、深さ60cmある。馬寮東官衙北半部との境をなす東西溝SD5280の西端から発し、佐伯門の南北中軸線の東延長上で東へ折れ、全長は160mに及ぶ。溝埋土から木簡1点および多量の土器・瓦等が出土した。木簡は和銅5年と推定されるもので、土器類は平城宮土器Ⅱを主体とし、瓦は藤原宮式が多い。また、SD5960の中ほどで検出したC字形に彎曲する大土壙SK6098はこの溝を切って掘り込まれているが、土壙埋土に含まれていた土器は平城宮土器Ⅱ・Ⅲに限られる。したがって、SD5960は宮造営当初からさほど隔らない時点で開削され、奈良時代前半内には埋め戻されたと考えられてきた。¹⁾

しかしながらSD5960からは平城宮土器Ⅳも併せ出土しており、また平城宮瓦編年Ⅲ期に属する6282F・6719A型式が出土している。したがって、少なく

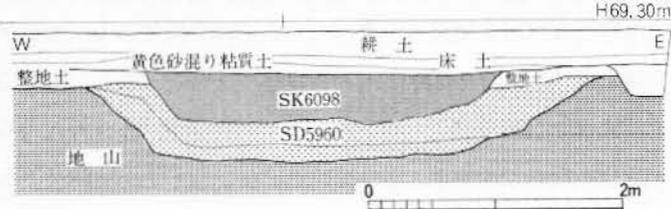


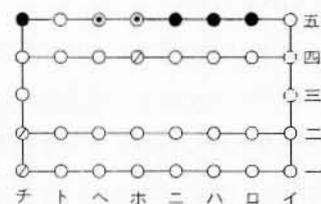
Fig. 15 SD5960とSK6098の関係

とも第Ⅲ期までは機能していたと考え直さなければならない。なお、SD5960を馬寮東官衙南半部の西面築地西雨落溝とみるむきもあるが、調査範囲内では築地の痕跡すらみあたらず、もし築地があったとしても、それは東側の未調査のところとなる。今後の検討課題としたい。

SD5960は北端で東に折れ、第37次調査で検出している東西溝SD5280へと連なると思われる。今回検出したSD5280の西端部と思われる溝は幅約3.2m、深さ1.1mほどの規模である。第37次調査においては、SD5280は東方へと115m以上の長さになること、当初は幅約6.5mであったものが、後に北寄りに幅2.4mほどの狭い溝(SD5280B)に改修されていることを確認している。¹⁾ SD5280西端部と思われる溝はSD5280東部と北肩を揃えるものの幅は狭く、改修後のSD5280Bに比定するのが妥当となる。しかし、このSD5280B西端部は第Ⅳ期まで存続したことも事実であり、この時期にはSD5960は既に埋っているわけだから連なりようがないことになる。この部分は現水路下にあたり十分な調査が行なえなかった地点でもあり問題点として残さざるを得ない。

SB6450 (PLAN 9; PL 8) 6ADC-H・M区

馬寮地域北部中央にある南北二面廂付東西棟建物で、この時期の正殿と考えられる。東西20.5m(7間, 10尺等間)、南北11.7m(身舎2間・南北両廂の出とも10尺等間)の規模である。身舎および南の柱掘形は一辺1.2m前後、深さ1mほどの方形状をなすが、北廂の柱掘形は一辺0.8m、深さ0.5mと小振りで浅

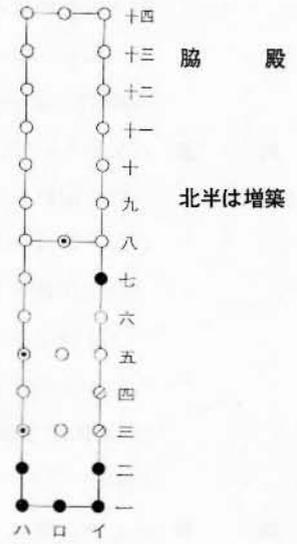


1) 『平城宮第37・39・40・41次発掘調査概報』1967 p.2。

い。北廂は後に追加したものであろう。北廂の柱掘形4カ所に断面八角形状に加工した柱根(径20~30cm, 長さ50~80cm)が残り, 柱間を計測すると平均2.93mとなる。多くの建物と重複するが, 柱穴の切り合い関係ではSB6173・6175・6451・6454・6460のいずれよりも古い。

SB6425 (PLAN 9・10; PL 12) 6ADC-M区

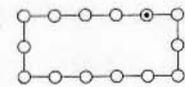
- * SB6450の西方に建つ南北棟建物で, 東西5.9m(2間, 10尺等間), 南北38.4m(13間, 10尺等間)と長大である。正殿SB6450に対する脇殿に相当する建物といえよう。南半7間分の側柱掘形は一辺1.0~1.5m, 深さ1m強の方形であるのに対して, 北半のものは一辺0.8m, 深さ0.6mとひとまわり小さい。同時施工ではなく, 北半は後の増築であろう。南半部には, 南から2・3・4・7間目の棟通りに柱穴があり, 特に7間目のものは側柱の掘形に匹敵する大きさをもつため, これを当初の北妻柱とみるのである。また, 棟通りの柱穴のうち南から2・4間目のものは掘形の大きさからみて間仕切柱と考えられるが, 3間目のものは著しく小型であるので床束の可能性が強く, SB6425の南半の一部は床張りであったと言えそうである。南端部を中心に6カ所で八角形断面の柱根(径20~30cm, 長さ50~130cm)が残り, 柱間寸法は平均2.95mである。



SB6450との配置関係をみると, 当初の北妻柱筋はSB6450の身舎南側柱筋に揃い, またSB6425の東側柱筋とSB6450の西妻柱筋との距離は11.6m(40尺)であり, 10尺を基準に計画的に配置したことは明らかである。なお, SB6425はSB6190・6195・6381・6385・6386・6419・6420と重複するが, 切り合いからいずれの建物より古い。

* **SB6180 (PLAN 10; PL 11) 6ADC-M区**

- * SB6450の南にあり, 西妻柱筋を揃えて建つ小規模な東西棟建物である。柱根はおろか柱痕跡さえほとんど残っていないため建物規模は正確でないが, 東西12m弱(5間, 7.5尺等間), 南北4.4m(2間, 7.5尺等間)ほどである。柱掘形は南側柱筋では一辺1.0m, 深さ0.5mの方形だが, 北側柱のものはやや小さく不整形をなす。SB6450の身舎南側柱筋からSB6180の南側柱筋までの距離は29.5m(100尺)であり, 両者は計画的な配置関係にあるとみなせる。SB6180はSB6450の前殿相当の建物であろう。他の遺構とは重複しない。



SB6170 (PLAN 7; PL 20) 6ADC-H区

- * SB6180の東南にある隅欠きの東廂付南北棟建物である。建物規模は東西8.8m(身舎2間・廂の出とも10尺等間), 南北24.8m(6間, 14尺等間)である。身舎の柱掘形は一辺0.8~1.0m, 深さ0.5mであるが, 廂のものは一辺0.5~0.7mと小振りであり, 北端の1個を欠く。廂には半間毎に間柱が立つが, 柱穴はさらに小さめである。長大な建物であり, 正庁一郭に付随するような位置にあることから馬房と考えられる。SB5951と一部の柱穴が重複しており, SB6170の方が古い。



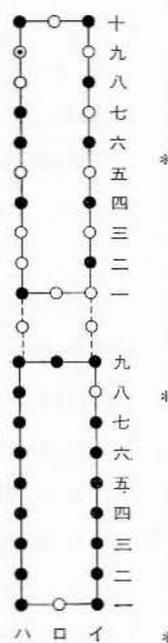
SB6330 (PLAN 11; PL 17) 6ADC-N区

- * SB6425の南妻から約24m南方にあり, SB6425と東側柱筋を揃えて建つ総柱建物である。東西5.7m(3間, 6.5尺等間), 南北6.3m(3間, 7尺等間)で, 南北がやや長い。柱掘形は一辺1m前後, 深さ0.8mと規格的で, 一部に柱根が残るほか柱痕跡も明瞭である。正庁一郭に付属する倉庫と考えられる。



SB5955・5956 (PLAN 15; PL 28) 6ADD-L・M区

馬寮地域東南にあり、南北に並んで建つ2棟の南北棟建物である。南棟SB5955は東西5.9m(2間, 10尺等間), 南北19.2m(8間, 8尺等間)であるのに対して、北棟SB5956は東西5.5m(2間, 9.5尺等間), 南北21.3m(9間, 8尺等間)で、梁間寸法が異なる。しかし、両者は棟通柱筋を揃えている。柱掘形はともに方形で、大きさは一辺0.8~1.0m、深さ0.8mを標準とし若干のばらつきがある。SB5955の北妻とSB5956の南妻の間は5.4m(18尺)離れるが、両側柱筋中央にも柱穴があるので、両者はこの2間(9尺等間)を馬道として共有する一連の建物であった可能性もある。両者とも柱根の遺存率が良く、断面八角形状をなし、径は14.5~23.5cmと共通するが、SB5956がコウヤマキであるのに対してSB5955はヒノキを用材としている。基準尺もSB5955の方がやや長い¹⁾。したがって、SB5956がまず建てられ、その南にSB5955を増築した段階で両者を馬道で結んだと考えるのが妥当であろう。正殿SB6450の東妻からSB5956の東側柱筋までの距離は14.9m(50尺)、またSB6450身舎南側柱筋とSB5955の北妻との間は101.0m(340尺)であり、これらの建物もまた正庁殿舎群と一体の計画のもとに造営されたものと理解できる。規模と形状から馬房と判断する。



SK6350 (PLAN 13; PL 16) 6ADC-M・N区

正庁殿舎群の西南方、倉庫SB6330の西にある長大な長方形の窪みである。東西6.5m、南北45m、深さ0.5mあり、南北方向に規格的に掘られている。同様の遺構は藤原宮西方官衙地区において検出されており²⁾(SK1140)、建物配置の類似性と合わせて関連が注目される。馬寮にふさわしい性格づけをすれば馬の洗い場とでもなろうか。底部に堆積した茶褐色粘土には、全般的に瓦・土器片とともに多量の炭化物がまじる。また、南半部特に西寄りからは、鞆羽口・鋳滓・焼石等、鍛冶に関する遺物が多量に出土している。しかもこれらの遺物は西側から投棄されたように堆積していた。SK6350を、その機能が終わった後に、西側に作られた鍛冶工場の廃棄物捨場として再利用したものとみられる。なお、仮設の南北塀SA3680はこのSK6350の底ではじめて検出されており(Fig. 14 参照)、SK6350はSA3680を撤去した後に掘り込んだものである。土壌底から出土した土器は平城宮土器II・IIIでそれ以降のものを含まず、また埋土の状況から投棄場としての役目が終わった時点で一気に埋め戻されたと判断できる。SB6400・6401の柱穴はこの埋土上面から掘り込んでいる。

SD6303 (PLAN 12・13) 6ADC-N, 6ADD-O・P区

馬寮地域西端において断続的に検出した素掘り南北溝である。幅約60cm、深さ35cmあり、検出できた分だけで全長45m以上におよぶ。SK6350の西側あたりで残りが良く、溝埋土は黒色粘質土で、鞆羽口や瓦片等が多量に出土した。南方で部分的に検出された南北溝SD6360はほぼSD6303の南延長上にあり、両者は一連の溝である可能性が強い。これらの溝は西面大垣推定心から東へ約3.5mの位置にあるので、大垣犬走り東側の側溝と考えたい。

大垣犬走り
東側溝

1) SB5956のばあい平均1尺=0.2958m、SB5955は1尺=0.300mである。

2) 『藤原宮報告II』p.27。

C 第Ⅲ期（奈良時代中頃）の遺構

第Ⅱ期の諸遺構のうち、佐伯門から東へ延びる宮内道路や大土壙 SK6350などは第Ⅲ期になっても存続する。この時期になって新規に造営された遺構としては建物11、堀3、井戸1などがある。これらのうち、馬寮地域の東面を画する南北塀 SA5950 が設けられた点が特に注目される。SA5950の南は佐伯門東の宮内道路北縁からはじまり、北は西面北門の推定南北中軸線を越え、調査範囲外へと延びる。したがって、区画としては西面北門以北の地域も含んでひとまとまりになっていたと考えざるを得ない。馬寮地域内の建物配置は、北半中央に主要殿舎である東西棟が建ち並び、南半は西側に数棟の建物があるのみで他は広大な空闲地である。

馬寮東官衙においては南半部西限の SD5960 を埋めた後、官衙域全体を築地で区画する。

* SA5950 (PLAN 5・6・7・14・15・16・17; PL 5・20・26・37・38)

6ADC-G・H・K, 6ADD-L・M・N, 6ADE-A区

馬寮官衙域の東を画する南北塀で、先述のように南端の柱穴は佐伯門東の宮内道路北縁にあり、北は調査範囲外へ延びるが、この間約273m (102間) がある。柱堀

* 形は不整形なものが多いが、標準的なもので一辺2mほどの方形をなし、深さ1.5~2.0mと極めて大きい。全体で3カ所に柱根が残るほかは全て抜き取られており、特に南半部では堀形に匹敵する東西方向の大きな抜き取痕跡がある。一部の柱穴底部には数枚の切板を礎盤として敷いている。柱根は下端から0.9~1.2m残存し、太いものは径45cm (1.5尺) ある。いずれも特に面取りはしていない。これらの柱根をもとに柱間寸法を計測すると平均9尺 (1尺=0.2976m) の値を得る。

この SA5950 については、従来馬寮官衙域における

* 造営当初からの区画塀と考えられてきたが、馬寮東官衙南半部の西辺を限る第Ⅱ期の南北溝 SD5960 の廃絶後に盛られた整地土 (灰褐色土) の上面から柱穴は掘り込まれており、造営当初までは遡り得ない。したがって、SA5950 の設置時期は従来の見解よりやや降ることとなる。また、SA5950 の柱穴は、第Ⅳ期に構築される馬寮北限築地 SA6475 の北雨落溝 SD6477 の溝底で検出されているので、この時までには存続し得ない。なお、SA5950 は第Ⅱ期の建物配置計画とはそぐわず、第Ⅲ期のものと合致するが、この点も SA 5950 を第Ⅲ

* 期の施設とみる有力な傍証となる。

官衙域東限の塀

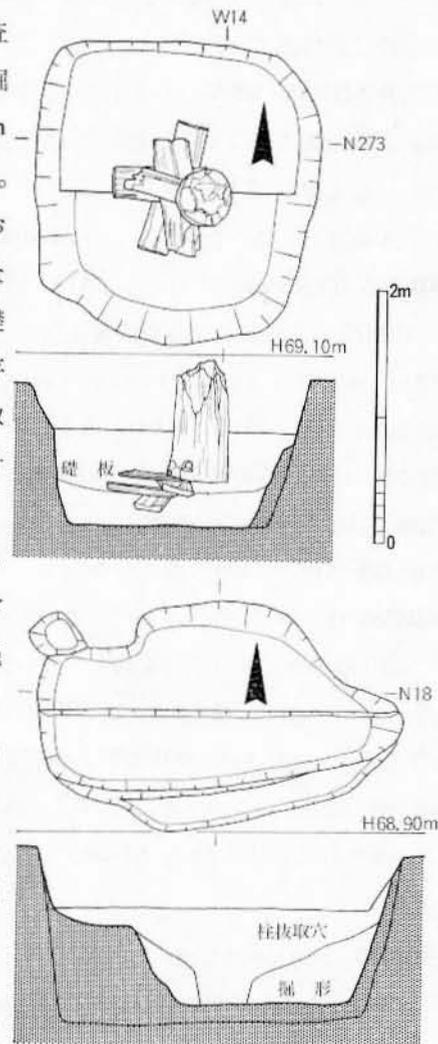


Fig. 16 SA5950の柱根と柱採取穴

1) 『年報1971』 p. 24~26.

SF6503・SD6483 (PLAN 3・4・5) 6ADC-G・H区

SA5950の東側に接して南北に走り、馬寮域と東官衙域との境をなす道路である。SD6483はその東側溝で、幅1.2m、深さ20cmあり、道路幅は6m内外となる。SD6483はSA5950と並行して調査範囲北端からさらに北へと延びる。南については約85mまでは良好に遺存するが、南半は削平のためほとんど消失している。

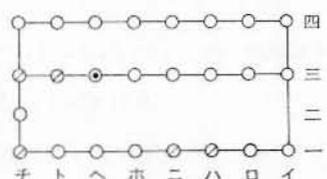
SD6499 (PLAN 3; PL 2) 6ADC-G区

SD6483の北端近くから直角に分岐する東西溝で、幅1m前後、深さ25cmの素掘り溝である。東は調査範囲外へと延びる。東端から西約10mの地点を中心に土壘状に広がる溝底から天平10・11年の年紀のある木簡が出土した。

SB6185 (PLAN 10・11; PL 11) 6ADC-M区

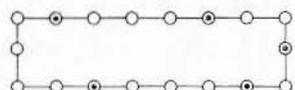
中心建物群

馬寮地域北半のほぼ中央に建つ北廂付東西棟で、この時期の中心建物である。東西20.9m(7間、10尺等間)、南北10.2m(身舎2間、10尺等間。廂の出14尺)の規模である。柱掘形は身舎・廂とも一辺1mほどの方形で、深さ0.7mあり、三へに柱痕跡が残る他は柱痕跡すらとどめないが、一部の柱掘形底に礎盤が遺存する。北方にある2棟の東西棟建物SB6195・6385とは桁行規模が等しく両妻柱筋を揃えており、一連の殿舎群を構成する。この地域に建つ多くの建物は時期を問わずに方位を平城方位に揃えているのに対して、これら3棟だけがE1°56'Nの振れを持つ点が注目される。第IV期の総柱建物SB6340と一部の柱穴が重複し、切り合いからこのSB6185の方が古い。



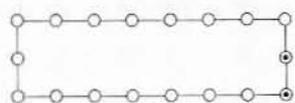
SB6195 (PLAN 10; PL 11) 6ADC-M区

SB6185の北に位置する東西棟建物で、その規模は東西20.9m(7間、10尺等間)、南北5.4m(2間、9尺等間)である。柱掘形は方形であるが、一辺0.5~0.8mと大きさにややばらつきがある。前後に建つSB6185の南側柱筋とSB6385の北側柱筋の間は35.7m(120尺)であるが、SB6195の南側柱筋はちょうどその中間に位置する。SB6425・6190と重複し、柱穴の切り合い関係からSB6425→6195→6190の順になる。



SB6385 (PLAN 9; PL 13・14) 6ADC-M区

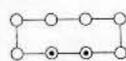
SB6195の北にあり両妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西長は20.9m(7間、10尺等間)でSB6195と等しいが、南北は6.0m(2間、10尺等間)あり、SB6195より梁間が1尺ずつ広い。柱掘形は不整形だが、一辺0.8m、深さ0.7mほどのものが一般的で、一部に柱痕跡が残る。SB6381と一部の柱穴が切り合い、SB6385が古い。SB6195・6385はSB6185に対する後殿と考えられよう。



後殿

SB6419 (PLAN 9; PL 13) 6ADC-M区

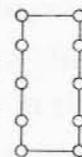
SB6385のさらに北にある小型の東西棟建物である。東西8.1m(3間、9尺等間)、南北2.7m(1間、9尺)で、南側柱筋はSB6385の北側柱筋から30尺の位置にあり、東方の南北棟SB6172の北妻と揃う。柱掘形は一辺0.6m前後で、東西にやや長く、一部に柱痕跡が残る。第II期のSB6425とは西妻柱掘形が重複し、このSB6419の方が新しい。



SB6454 (PLAN 9; PL 13) 6ADC-H区

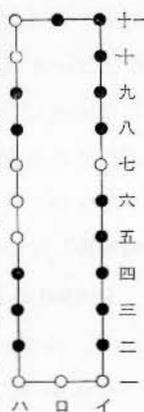
SB6419の東方にあり、SB6419の北側柱筋と北妻を揃えて建つ南北棟建物である。妻柱がなく東西は1間であるが、北で4.2m(14尺)、南で4.8m(16尺)と歪み、南北は11.1m(4間)で柱間が不揃いなため、仮設的な建物と思われる。柱掘形は円形状

* で、SB6419と共に3棟の主要殿舎群の付属屋と考えられる。



SB6172 (PLAN 6; PL 10) 6ADC-H区

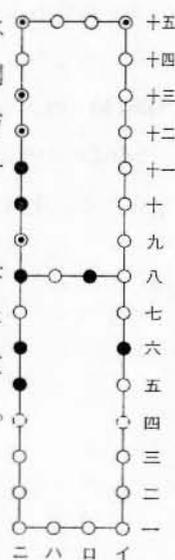
主要殿舎群の東方にある南北棟建物で、東西6.6m(2間, 11尺等間)、南北28.6m(10間, 9.5尺等間)の規模である。柱掘形は一边0.8m前後の方形をなし、深さ0.3~0.5mと浅い。しかし、柱根の残存状況が比較的良く、特に東側柱筋では9本も残っていた。柱間寸法は平均2.844mであり、1尺=0.2994mとなる。SB6195・6385の東妻からこのSB6172の西側柱筋までの距離は26.9m(90尺)であり、またSB6172の南から1間目の梁行柱筋までの距離も26.9m(90尺)であり、SB6195の南側柱筋と揃う。中心建物SB6185とともに、これらは一連の配置計画によって造営されており、このSB6172はいわば東脇殿に相当する建物と考えられよう。SB6173・6175・6464と重複し、柱穴の切り合い関係ではいずれよりも古い。



東脇殿

SB5951 (PLAN 7; PL 22) 6ADC-H区

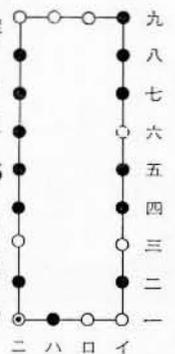
SB6172の南にあり、西側柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。その規模は東西8.1m(3間, 9尺等間)、南北40.6m(14間, 10尺等間)と長大で、梁行3間の特異な建物である。柱掘形は東西0.8m、南北1.5~1.8mと南北に長い長方形で、深さは0.5m前後である。桁行中央に両妻にあわせて梁行を3間割とする間仕切柱が立つ。一部の柱穴に柱根が残り、桁行の柱間寸法は平均2.97m、梁行は2.70mとなる。北妻からSB6172の南妻までは6.0m(20尺)、桁行中央の間仕切柱筋は中心建物SB6185の南側柱筋から11.6m(40尺)の位置にあり、このSB5951も一連の配置計画に則っている。SB6170およびSB6168と重複し、柱穴の切り合いからSB6170→5951→6168の順に造営されたことになる。建物規模と位置から馬房と考える。



馬房

SB6120 (PLAN 23; PL 25) 6ADD-P区

馬寮地域中央やや南の西面大垣沿いにある南北棟建物で、東西7.9m(3間, 9尺等間)、南北23.3m(8間, 10尺等間)である。柱掘形は0.6×0.8mほどの長方形のものが多く、深さは平均0.5mである。西側柱の掘形は仮設の南北塀SA3680の柱穴を切る。柱根の遺存率が高いが、柱間寸法は桁行で平均2.93m、梁行で2.63mである。柱根は径20cm内外で細い。この時期の中心建物群SB6185等の西妻からSB6120の西側柱筋までの距離は23.7m(80尺)、またSB6185の南側柱筋からSB6120の北妻までは68.1m(230尺)で、かなり南方に隔っているとはいえ同一の計画に基づいて造営されたものといえる。なお、SB9551とならんで、この時期には梁行3間の建物が2棟存在することになる。このSB6120も馬房であろう。



馬房

SB6360 (PLAN 13; PL 19) 6ADC-M区

SB6185の西南、大土壙SK6350と西面大垣との間に建つ南北棟建物である。東側柱筋を除き遺存状態は良くなく、柱穴の一部を欠くが、東西5.2~5.6m(3間)、南北19.3m(9間、7尺等間)の規模になる。東側柱筋が比較的整然と並ぶのに対し、西側柱には若干の出入りが認められる。柱穴は径0.4~0.5mの円形状で、埋土には焼土が混じる。建物内部の床面、特に南半部は周囲の遺構面より0.5~0.7m高く、焼土が充満した無数の大小ピット群のほか、炉跡と思われる周辺が焼けて固くなった径25cm前後の土壙状の窪みが数基あり、焼土とともに鞆羽口や鉞滓・土器・瓦等がかなりの

鍛冶工房

の量出土した。これらは鍛冶工房跡と考えられ、SB6360はその簡単な覆屋であろう。なお、東にある大土壙SK6350にはこの工房からの大量の廃棄物が投入された形跡が窺え、この時期まで存続したことが知られる。

SB6403 (PLAN 12; PL 15) 6ADC-M区

SB6360の北方にある南北棟建物で、東西6.0m(2間、10尺等間)、南北17.8m(6間、10尺等間)以上あり、北妻は調査範囲外へ出る。柱掘形の大きさは不揃いで、一辺0.6~0.7mの方形状をなす。SB6401と南妻部分が重複し、切り合いからこのSB6403の方が古い。中心建物群等に見られた配置計画にはこのSB6403は乗らない。これは大土壙SK6350によって制約されたためであろう。と言うのは、SB6403のすぐ東にある目隠し塀SA6402は中心建物群の西妻から20.9m(70尺)の位置にあるからである。

SB6140 (PLAN 19; PL 32) 6ADD-P区

倉庫

SB6120の東にある総柱建物で、第II期のSB6330と構造的に類似し、倉庫と考えられる。東西4.5m(3間、5尺等間)、南北5.4m(3間、6尺等間)で、南北方向が

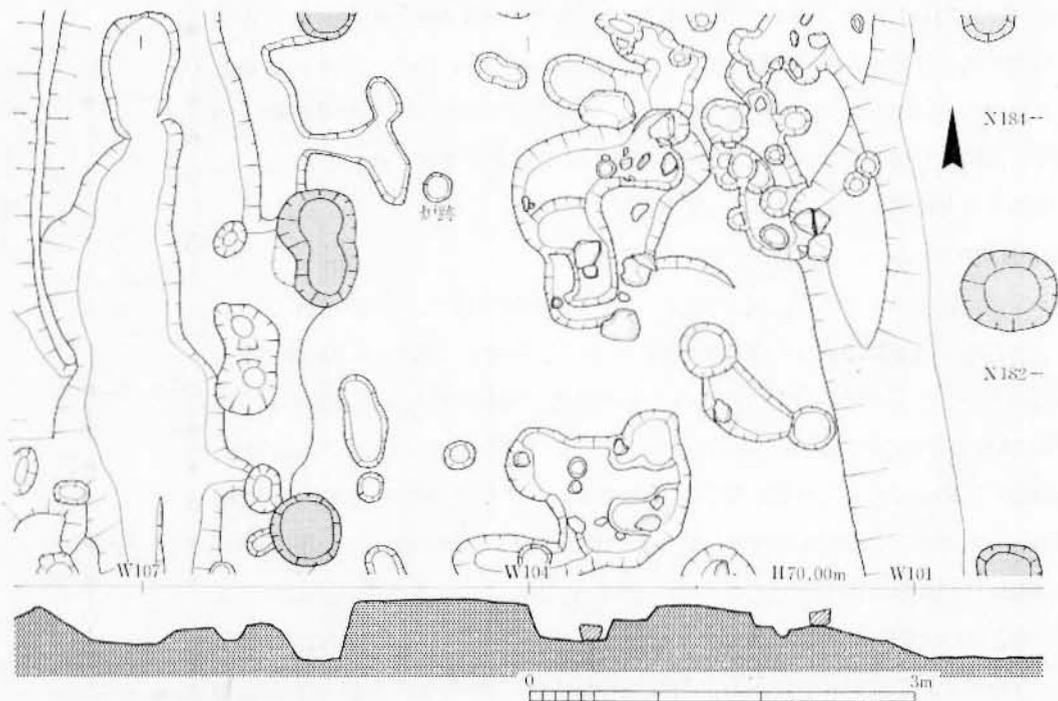
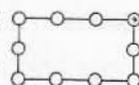


Fig.17 SB6360 内部の状況(網は柱穴、断面はN183ライン)

やや長い。柱掘形は一辺0.8mで規格的であり、柱根ないしは柱痕跡が比較的良く残る。南妻はSB6120の南妻と揃い、またSB6120の西側柱筋からSB6140の東側柱筋との間は29.6m(100尺)で、計画的に配置されたことを示す。

SB6095 (PLAN 24; PL 28) 6ADD-P区

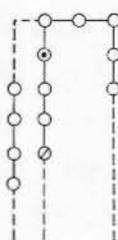
- * SB6140の南妻から26.6m(90尺)南に位置する小規模な東西棟建物である。東西9.0m(3間, 10尺等間), 南北4.8m(2間, 8尺等間)である。柱掘形は一辺0.6~0.7m, 深さ0.3~0.5mと小さく浅い。黄褐色粘質土の整地層下位から掘り込まれており、東南脇に位置する第IV期の南北棟建物SB6100が整地土上面において検出されていることから、それより古いものとみなした。



* **SB6500** (PLAN 3; PL 3) 6ADC-G区

馬寮東官衙北部で検出した西廂付南北棟建物である。身舎の規模は東西5.4m(2間, 9尺等間), 南北10.8m(4間, 9尺等間)以上である。柱掘形は一辺1m内外, 深さ0.5mほどのものが多い。北妻柱穴はやや小さく、東北隅柱とともに掘形底に木の礎盤を敷く。北妻の柱穴はいずれも第IV期の東西溝SD6507の底においてはじめ

- * て検出されており、この溝より古い。身舎の西2.6m(9尺)に南北に並ぶ径0.8m大の円形柱穴は、従来独立した南北扉とみなしていたが、SB6500の身舎の梁行柱筋に揃うので、西廂と判断した。ただし、北2間分は欠ける。



SA6341 (PLAN 13; PL 18) 6ADC-N区

- * 大土壙SK6350の東にある南北扉で、全長29.4m(10間, 10尺等間)を検出、さらに1~2間南方へ延びる余地がある。柱掘形は一辺0.7m内外で、深さ0.4mと浅く、柱痕跡はほとんど残っていない。第IV期の南北棟建物SB6345の南妻柱と柱穴が切り合い、このSA6341の方が古い。時期の決め手を欠くが、第III期の中心建物SB6185等の西妻から11.9m(40尺)の位置を占めることから、同時期に属し、西方にある鍛冶工房覆屋SB6360および投棄場となったSK6350の目隠扉と考える。

目 隠 扉

* **SA6402** (PLAN 12) 6ADC-O区

大土壙SK6350の北、SB6403の東にある南北扉である。全長12.5m, 5間分を検出した。柱間寸法は一定でない。柱掘形は一辺0.4mの方形状でやや小さい。SA6402の南端は西にある南北棟建物SB6403の南妻と揃い、またSB6403の東側柱筋からSA6402は3.0m(10尺)の位置にあるため、同建物の目隠扉と考えられる。

* **SA6138** (PLAN 19; PL 32) 6ADD-P区

総柱の倉庫SB6140の南2.9m(10尺)にある東西扉で、全長12.5m(4間)を検出したが、柱間寸法は不揃いである。柱掘形は一辺0.8~1.0mの方形状をなす。はるか北方にある殿舎群の正殿相当建物SB6185の南側柱筋から94.8m(320尺)の位置にあたる。

SE6166 (PLAN 7・11; PL 41) 6ADD-K区

- * 馬房と推定した南北棟建物SB5951の西南脇にある井戸。掘形は一辺2.7mの方形で、深さ2.5mあり、ほぼ中央に井戸枠を据える。井戸枠は長さ1.3m, 成25cm前後, 厚さ2.5cmの板を蒸籠組としたもので、底から10段目までが遺存する。枠板を一段据える度に裏込めの土をつめるという丁寧な仕事になる。井戸底はガラス混り灰色砂層に達する。井戸の上限については明

1) 『年報1971』p.24~25。

らかでないが、建物配置からみて第Ⅱ期のものとは併存し得ず、第Ⅲ期になって掘られたもの
と考える。井戸枠内堆積土から平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する土師器・須恵器や削り掛け・曲物等
の木製品が出土した。なかでも「主馬」の墨書を有する土師器坏1点が注目される。したがっ
て、次の第Ⅳ期まで存続したことは確実である。

SX6119 (PLAN 20) 6ADD-P区 *

倉庫 SB6140の西南にある2条の東西方向の柱穴列である。柱掘形は一辺0.5mほどの方形状
をなし、5.2～6.5mの間隔で3個宛並ぶ。各々の柱穴は5.2～5.5mの間隔で南・北でも対応す
る。しかし、柱穴が小さい上に柱間が極端に広いため建物とは考えにくく、性格は不明である。
馬房にふさわしい性格を想定するならば、馬を仮につないでおく施設のようなものであろうか。

SX6380 (PLAN 10; PL 11) 6ADC-M区 *

中心建物群中の SB6195の西北部で重複する東西棟建物風の柱穴群である。東西9.0m (3
間, 10尺等間), 南北3.0m (1間, 10尺) と小規模ながら整然とならぶ。掘形は一辺1m内外の方
形状で、深さ0.8mと大きい。柱穴の重複関係から SB6425 (第Ⅱ期) より新しく、SB6190 (第
Ⅳ期) より古いので、この間のものと判断される。しかし、第Ⅲ期の SB6195とも重複してお
り、これとは並存し得ない。東南隅柱穴を断ち割った結果、柱痕跡も採取穴も無いことが判明
したので、掘形は掘られたものの計画変更のため埋め戻されたものと考えられた。

SX5941 (PLAN 22; PL 25) 6ADD-O区 *

O区の南西部馬房 SB6120の東北にある2列の東西柵状遺構。柱穴はいずれも径0.6mほど
の円形状であり、各柱穴は南北で対をなして東西に正しく並ぶ。柱穴の間隔は東西方向が5.7
m (19尺), 南北が6m (20尺) である。SX6119と同様の機能をもつものと考えられようが、詳
細は不明と言わざるを得ない。

D 第Ⅳ期 (奈良時代後半) の遺構

馬寮官衙として最も充実した様相が窺える時期で、遺構としては建物15, 築地4, 塀5, 溝
12, 土塙1などがある。井戸 SE6166はこの時期まで存続する。馬寮域の東限は掘立柱塀 SA
5950Aから同位置に築かれた築地 SA5950Bに変わる。ただし北端は、西面北門から東へ通ずる
位置に設けられた馬寮北限の東西築地 SA6475と合し、北へは延びない。内部の空間構成は基
本的には第Ⅱ・Ⅲ期を踏襲したもので、北半中央北寄りに主要殿舎群を置き、その南に中・小
の雑舎を配する。南半中央は何らの遺構もない広場の空間で、南西隅に大型の南北棟建物2棟
が並び建つのである。主要殿舎群の周囲は塀で囲まれるが、そのさらに東・西・北には巨大な
二面廂付建物が建ちさらにこれを囲む。このように内・外郭の二重構造となっている点はこの
時期に固有の配置である。

馬寮東官衙の西および北も築地によって区画される。北面築地 SA6510は馬寮の北面築地 SA
6475と棟通りを揃えており、この時期には馬寮ばかりでなく、かなり広範に宮内の整備が促進
されたようである。

SA5950B, SD6160・6161 (PLAN 5・6・7・14・15・16・17; PL 5・20・26・37・38) *

東面築地 SA5950Bは掘立柱塀 SA5950Aを取り壊した後、同位置に構築された南北築地で、東西両

側に雨落溝 SD6160・6161 を伴なう。東雨落溝 SD6160 は幅1.6~2.6m、深さ40cm、北端は別の溝 SD6513によって切られているが、西へ曲り東西築地 SA6475の北雨落溝 SD6477と合していたと思われる。西雨落溝 SD6161 は幅0.7~1.5m、深さ30cmあり、北は SA6475 の南雨落溝 SD6479 と合するほか、北雨落溝 SD6477 から木樋暗渠 SX6504 を通して水を受けている。西

- * 側溝 SD6161 がこれらと合流する付近はオーバーフローのためか大きくえぐられ、土塊状にひろがっている。東西両雨落溝間の心距離は約4mであり、細礫混り黄褐色粘土の積土が部分的に遺存している。SD6160 から平城宮土器Ⅳ・Ⅴの土器が出土しており、奈良末まで存在したと判断できる。

SA6475, SD6477・6479 (PLAN 5・8; PL 4, 6) 6ADC-G・L区

- * 馬寮地域の北を限る築地とその南・北雨落溝である。東端は南北築地 SA5950B に接続する。北雨落溝 SD6477 は幅1.0~1.5m、深さ約20cm、東端は氾濫のためやや乱れる。一部は木樋暗渠 SX6504 によって築地下を横断して南北溝 SD6161 に注ぎ、また一方 SA5950A の柱穴埋土を掘り込んで南北溝 SD6160 にも注ぐ。南側溝 SD6479 は全体的に遺存状態が悪いが、幅1.5~2.0m、深さ40cmあり、東端は SD6161 に注ぐ。第Ⅲ期の南北塀 SA5950A の柱穴は北雨落溝 SD6477 の溝底で検出されており、SD6477 は SA5950A より新しい。また、SD6477 の埋土から平城宮土器Ⅴの土器が出土している。南雨落溝の直ぐ南に並行する東西溝 SD6473 がある。この溝は東方にある馬寮東官衙の北面築地が改修された後の南雨落溝と一直線上に並ぶので、あるいは改修後の SA6475B の南雨落溝であるかもしれない。

SA6150, SD6151・6152 (PLAN 3・4; PL 2) 6ADC-G・H・K区

- * 馬寮東官衙の西面を画する南北方向の築地である。東西の雨落溝 SD6151・6152 に挟まれた幅約4mの範囲に築地基底部のものと思われる褐色粘質土の積土が厚さ20cmほど残存する。築地の北端は西面北門の推定南北中軸線の東延長上にあたり、東へ折れて調査範囲外へ延びる (SA6492)。東西溝 SD5280 の北岸まで100mほどを検出したが、以南の状況は不明である。SD5280B には、ちょうど SA6150 の南の位置に暗渠が設けられており、築地がさらに南へと延びていた可能性は高い。東雨落溝 SA6151 は幅2.0~3.0m、深さ30cmほどであるが、南部ではオーバーフローしたため両岸が崩れ、土塊状に拡がっている。西雨落溝 SD6152 は幅1.0~2.5m、深さ40cmで、両溝間の心距離は平均7mである。

SA6150 の構築時期については、両雨落溝 SD6151・6152 の埋土から平城宮土器Ⅱ・Ⅲを主体とした土器が出土していることから第Ⅲ期に遡る可能性も否定できない。しかし、このあた

- * りの整地土を切って2条の溝は掘り込まれており、また両溝からは平城宮土器Ⅴ~Ⅵの土器もあわせて出土しており、第Ⅳ期のものと考えても矛盾はない。次に述べる北面築地は第Ⅳ期中で改修され、南雨落溝を当初の SD6512 から若干南につけ替えて SD6507 としているが、南北築地 SA6150 との交叉点部分に暗渠 SX6505 を設けている。この SX6505 部分での埋土から平城宮土器Ⅳ・Ⅴの土器が出土しており、また、SA6150 のほぼ中央部を切るC字形に彎曲する溝状土塊 SK6155 からは平城宮土器Ⅴ~Ⅵの土器が出土している。このため、SA6150 の下限は奈良時代の末におくことができる。

SA6510, SD6511・6512 (PLAN 3; PL 3) 6ADC-G区

馬寮東官衙域の北限築地とその南北雨落溝である。北面築地 SA6510 は西面築地 SA6150 の

北面築地

馬寮東官衙
西面築地

馬寮東官衙
北面築地

北端から始まり、東は調査範囲外へと延びる。北雨落溝 SD6511 は幅0.4~0.9m、深さ15cm、また南側溝 SD6512は幅1.1m以上（次に述べる SD6507によって南岸を切られている）、深さ20cmで、両溝心心距離は約4.5mである。北雨落溝 SD6511 から奈良時代末の土器や土馬が出土した。

SD6507・6513, SX6505 (PLAN 3; PL 34) 6ADC-G区

SD6507は馬寮東官衙北面築地 SA6510の南雨落溝 SD6512の南半に重複し、これを切る東西溝である。西端は馬寮城東面築地 SA5950B付近にあり、築地外周の雨落溝東北隅を切りつつ北折して南北溝 SD6513となり、調査範囲外北方へ延びる。東も調査範囲外へ延びる。幅約2m、深さ40cmある。東官衙の西面築地 SA6150と交叉する部分には暗渠 SX6505を設けているため、築地と同時存在とみる。しかし、当初の南雨落溝を切っており、築地を改修して若干規模を大きくした後の南雨落溝と考えるのが妥当であろう。築地の下を暗渠によってくぐり抜け、さらに西北へと続く理由については不明である。暗渠 SX6505は溝の南北両岸に沿って径15cm、長さ60cm以上の木杭を約25cm間隔で内傾させて打ち込み、背に側板を置くという簡単な構造をなす。内部の埋土から平城宮土器IV~Vの土器が出土した。

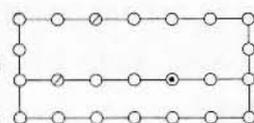
SX6514 (PLAN 14; PL 21) 6ADC-K, 6ADD-L区

馬寮東官衙のほぼ中央部を横断する東西溝 SD5280Bに設けられた暗渠である。西面築地 SA6510と交叉する地点にあたり、SA6510はさらに以南へと延びていたことになろう。SD5280Bのほぼ中央に幅約1.5m、深さ40cmの掘形を設け、南北両側に径10cm、長さ90cm以上の杭を約40cm間隔で内傾させて打ち込み、側板を背に置く構造はSX6505と同一のものである。設置した時期は同時でSA6510の改修に伴うものと考えられよう。既述のように、この時点でSD5280がどのように機能していたかは不明である。

SB6420 (PLAN 9; PL 13) 6ADC-M区

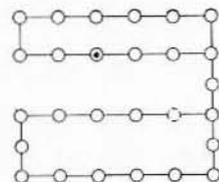
中心建物

馬寮地域北半部中央やや西北寄りにある南廂付東西棟建物である。東西17.9m（6間、10尺等間）、南北7.8m（身舎2間、8尺等間。廂の出10尺）とやや小規模だが、この時期の中心建物である。柱掘形は径0.8mほどの円形で、深さは40cm程度のものが多い。柱根はほとんど抜き取られている。第二期の脇殿 SB6425の柱穴を2カ所で切り合い、SB6420が新しい。



SB6381 (PLAN 10; PL 14) 6ADC-M区

SB6420の南にあって西妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西15.0m（5間、10尺等間）、南北3.0m（1間、10尺）と小規模で、柱掘形も一辺0.5mほどと小さい。この建物の北側柱筋は、北のSB6420の南側柱筋と南のBS6190の南側柱筋との中間にあたり、また三者とも西妻を揃えているところから、一体のものとして計画的に配置されたとみなせる。第三期の後殿 SB6385と切り合い、SB6381が新しい。



SB6190 (PLAN 10; PL 14) 6ADC-M区

2棟の前殿

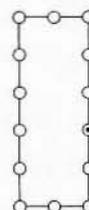
SB6381の南にあり、SB6420と共に西妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西15.0m（5間、10尺等間）、南北4.8m（2間、8尺等間）で、SB6381と桁行規模が等しく、東妻柱筋も揃う。一部の柱穴は検出されていないが、柱掘形は一辺0.7mほどある。SB6381との間の東妻柱筋中央でも柱穴を検出しており、少なくとも東側面は連っていた可能性がある。SB6195・6425・6380と柱穴が重複し、切り合い関係では他のすべてより新しい。SB6381・6190はSB6420に対

する前殿と考えられる。

SB6451 (PLAN 9; PL 8) 6ADC-M区

SB6420の東に建つ南北棟建物。東西5.2m (2間, 9尺等間), 南北14.9m (5間, 10尺等間) である。柱掘形は一辺0.7~0.8mの方形状のものが多く, 柱痕跡はあまり

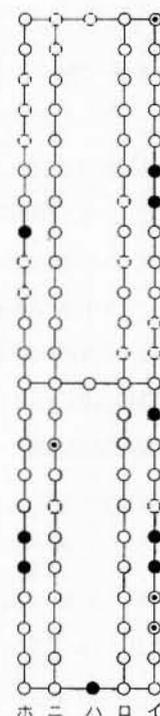
- * 明瞭でない。東側柱筋はSB6420の東妻から15.0m (50尺) の位置にあり, 北妻柱筋はSB6420の北側柱筋に揃う。SB6451はSB6420の脇殿と言えよう。第II期の正殿SB6450と重複し, 柱穴の切り合い関係からSB6451が新しい。



SB6175 (PLAN 5・6; PL 9) 6ADC-G・H区

SB6451のさらに東方, すなわち馬寮地域の東北隅にある東西二面廂付

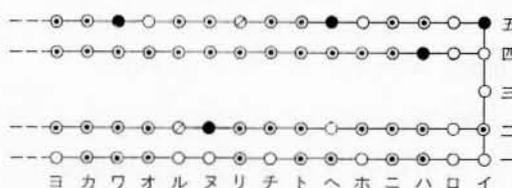
- * 南北棟建物である。東西10.8m (身舎2間9尺等間, 両廂の出8.5尺), 南北52.4m (22間, 8尺等間) と極めて大型である。南から10間目の梁行中央に間仕切柱があり, これを境に南半10間と北半12間に分れる。南半の柱掘形は一辺0.7~0.9mで南北がやや長い方形状のものが多いのに対し, 北半では一辺0.5~0.8mと全体に小振りでしかも若干丸味を帯びる。北半部は増築の可能性があるろう。西側柱筋は中心建物SB6420の東妻柱筋から東へ26.8m (90尺), 前殿SB6381・6190の東妻柱筋からは29.6m (100尺) の位置にあり, SB6190の南側柱筋に揃えて南妻柱が立ち, さらに間仕切柱筋がSB6420の南廂柱筋に大旨揃うなど, 中心建物群と一体の計画のもとに配置されている。柱根の遺存率が悪く, かるうじて9本が残るが, 腐蝕著しく径は33.5~17.1cmとばらつく。すべてヒノキ材である。SB6460・6172・6173と重複するが, 柱穴の切り合いではSB6172より新しく, SB6460・6173よりは古い。



外郭建物

SB6430 (PLAN 8; PL 7) 6ADC-L・M区

中心建物群の北にある南北二面廂付東西棟建物である。西妻は調査範囲外にあり, 東西33.3m (14間, 8尺等間) 以上, 南北10.8m (身舎2間, 10尺等間。両廂の出各8.5尺) の規模である。柱掘形は一辺0.8mほどの方形状が一般



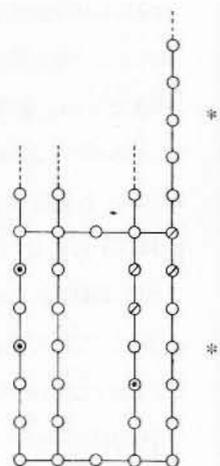
- * 的で, 深さは0.4mと浅い。柱痕跡が明瞭に残るほか, 5カ所に柱根が遺存する。北廂柱筋は東方に建つ二面廂付南北棟建物SB6175の北妻柱筋と揃い, 南廂柱筋から正殿SB6420の北側柱筋までの距離は8.9m (30尺) である。このSB6430は, 第63次調査の段階では第III期に属すると考えられていたが, 第127次調査において柱掘形から平城宮土器IV~Vの土器が出土した¹⁾こと, 第III期の並行して建つ3棟の中心建物SB6185・6195・6385とは棟の方位を違え, しかもこれら3棟は整地土下位で検出されているのに対してSB6430は整地土上面で検出可能であったことから, 第IV期に変更することとなった。また, 東方の南北棟建物SB6175および次に述べる西方のSB6400と共に同じ長大な二面廂付建物であり, 柱筋が互いに揃うことからこれらは同時期のものとするのが妥当である。SB6469・9552・6429と重複し, 柱穴の切り合い関

1) 『年報 1971』p.24~26。

係によればいずれの建物よりも SB6430が古い。

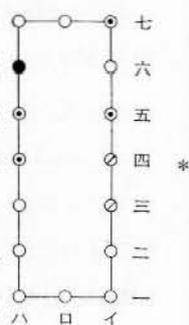
SB6400 (PLAN 12; PL 15・16) 6ADD-O区

SB6420の西方に建つ東西二面廂付南北棟建物である。北半は調査範囲外に出るが、東廂のみは11間分まで検出した。東西11.8m (身舎2間・両廂の出とも10尺等間)、南北33.0m (11間、10尺等間)以上の規模となる。柱掘形は一边0.8m、深さ0.5mほどで、柱痕跡は鮮明でないが、一部の柱穴底部には木製礎盤が遺存する。南妻柱筋の2つの柱穴は第Ⅱ～Ⅲ期の大土壙 SK6350の埋土上面から掘り込んでいるので、SK6350よりは新しく、また柱穴の切り合いから SB6401より古い。SB6400の東廂柱筋は SB6420等中心建物群の西妻柱筋から9.0m (30尺)の位置にあり、しかも南妻柱筋は前殿 SB6190の南側柱筋に揃えており (したがって、東方はるか離れた SB6175とも南妻を揃えることになる)、SB6175・6430 および 6400 という3棟の大型二面廂付建物は、中心建物群の周囲に計画的に配置されていることは明らかである。なお、SB6400の東廂南端の柱穴は土壙 SK6397によって切られているが、土壙埋土から平城宮土器Vの土器が出土しており、SB6400の下限の時期が窺われる。



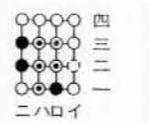
SB6345 (PLAN 13; PL 18) 6ADC-M・N・O・P区

SB6190の西南、SB6400の東南にある南北棟建物である。規模は東西7.1m (2間、12尺等間)、南北21.1m (6間、12尺等間)で、桁行・梁行ともに柱間の広いことが特徴である。柱掘形は一边1.0～1.2mの方形状で、深さ0.5mあり、北半部に柱痕跡が残る。棟の方位はN2°Wほど偏し、第Ⅲ期の中心建物 SB6185等の振れとほぼ等しいが、柱穴の切り合い関係から第Ⅲ期の SA6341より新しく、また一部の柱掘形から平城宮土器Vの土器が出土しているため、第Ⅳ期に属すると考える。SB6345の東側柱筋は SB6190の西妻柱筋から3.0m (10尺)の位置にあり、共通の配置計画に基づいているらしいこともその傍証となろう。



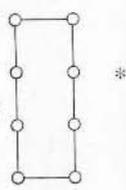
SB6340 (PLAN 11; PL 17) 6ADC-N区

倉庫 SB6345の東側にある総柱建物で、倉庫と考えられる。第Ⅱ期の SB6330、第Ⅲ期の SB6140とよく似た構造をなし、東西4.0m (3間、4.5尺等間)、南北5.4m (3間、6尺等間)と南北にやや長い平面であることも共通する。柱掘形は方形状だが大きさは一定せず、一边0.9m前後、深さ0.7mのものが多い。柱痕跡が明瞭に残るほか、柱根も3本遺存する。第Ⅲ期の SB6185との柱穴の切り合いからこの建物の方が新しい。SB6345の東側筋柱から SB6340の西側筋柱まで11.8m (40尺)、また SB6190の南側筋柱から SB6340の南妻まで17.7m (60尺)であり、中心建物群と一体の計画のもとに配置されたものと理解できる。



SB6177 (PLAN 11) 6ADC-K区

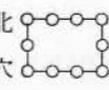
SB6430の東南方にある南北棟建物。SB6345とは馬寮官衙域中軸線に対してほぼ対称の位置にある。しかし規模は小さく、東西4.5m (1間、15尺)、南北12.6m (3間、14尺等間)である。これも SB6345と同様柱間が広い。柱掘形は円形状で、径0.4～0.6mと柱間の割には小さい。しかも妻柱を欠いており、仮設的な建物と思われる。あるいは上部構造を欠いた単なる馬の囲い場のようなものかもしれない。ただし、東側柱筋は内郭



の東を画す南北塀 SA6455と揃い、北妻は内郭南を画す東西塀 SA6186から 17.8m (60尺) の位置にあり、規制が働いていたとみなせる。

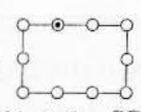
SB6168 (PLAN 7; PL 22) 6ADC-H・K区

SB6177の東北方に建つ小規模な東西棟建物。東西5.0m (3間, 6.5尺等間), 南北4.2m (2間, 7尺等間) で、柱掘形の大きさは一辺0.4~0.8mと不揃いである。柱穴の重複から SB5951より新しい。西側柱筋は北側の長大な東西二面廂付南北棟建物 SB6175の東廂柱筋と揃う。



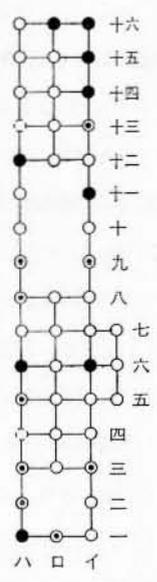
SB6165 (PLAN 7; PL 22) 6ADC-K区

SB6168の南方で、井戸 SB6166の東側にある東西棟建物。東西8.1m (3間, 9尺等間), 南北5.4m (2間, 9尺等間) で、柱掘形は方形のものが多い、一辺0.7m, 深さ0.7mある。柱穴の一部が第II期の SB6170と重複し、より新しいことがわかる。SB6168の南側柱筋と SB6165の北側柱筋との間は18.0m (60尺) であり、かつ西妻柱を揃えて建つ。



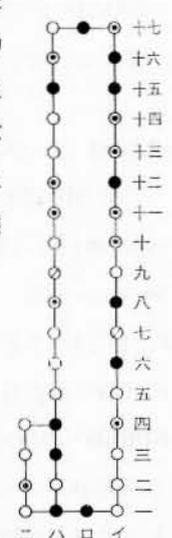
SB3690 (PLAN 25; PL 33) 6ADC-P・Q区

佐伯門の東北、すなわち馬寮地域西南隅にある長大な南北棟建物。東西5.3m (2間, 9尺等間), 南北39.7m (15間, 9尺等間) である。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さは0.8~1.0m程度のものが多い。柱穴には柱抜取痕跡を持つものがあるが、一方柱根を残すものもあり、すべてが抜き取られているわけではない。棟通りには間仕切柱のほか、側柱筋に合わせて床束と思われる径0.4m前後の小柱穴が掘られるばあいが多い。特に北から4間目の間仕切柱以北の一室は全体に床張りである。南半においては部分的に床束の柱穴を欠くが、恐らく同様に床張りであったものと思われる。なお、東側柱筋南から4~6間目に小廂(廂の出2.1m, 7尺)が付く。またこれとは別に、側柱中間の入側および棟通りに規則的に並ぶ一辺0.2~0.4mの小柱穴群がある。建物外部において対応する柱穴が見つからない点で問題を残すが、足場穴と理解できよう。この SB3690は東に並ぶ SB6100と共に、かつては第II期に属すると考えられていた¹⁾。遺存する柱根から求められた基準尺が1尺=0.294mと短い点を主たる根拠としたものである。しかし、この数値は第II期としても短か過ぎるし、建物配置の面からは第IV期と見るのが妥当であろう。まず SB3690の東側柱筋がはるか北方にある大型二面廂付南北棟 SB6400の東側柱筋と揃うこと、東に並ぶ SB6100とは南妻を揃えていて同時期と見られるがこの SB6100の柱穴は整地土上面から掘り込まれ第II期には廻り得ないことがその理由である。建物の形態から馬房と考えられ床張り部階上は倉庫であろう。



SB6100 (PLAN 24; PL 35) 6ADD-N・Q区

SB3690の東側に並んで建つほぼ同規模の南北棟建物である。東西4.8m (2間, 8尺等間), 南北38.2m (16間, 8尺等間) で、西側柱南端から3間に廂が付く。廂の出は3.3m (11尺) である。身舎の柱掘形は一辺0.8~1.2mの方形で、深さ0.7m内外であるが、廂の柱掘形は一辺0.6~0.7mと小さい。全体に柱根の遺存率が良く、これらから求めた基準尺は1尺=0.298m以上



馬房

1) 『年報 1969』 p.34~37。

SK6098 (PLAN 16; PL 27・29) 6ADD-M・P区

M・P区境東端にある溝状の大土塋。幅約3m、深さ40cmあり、C字形に彎曲しており、東半部は調査範囲外へ出る。この土塋埋土から平城宮土器Ⅱ・Ⅲの土器が出土しているが、馬寮東官衙南半区域の西を限る南北大溝SD5961が埋めたてられたのちの整地土を切って掘り込まれており、実年代は下る。

E 第Ⅴ期(平安時代初頭)の遺構

この時期に属する遺構には、建物・溝・井戸・土塋などがある。官衙の範囲は第Ⅳ期までと同様であるが、中央部付近に東西溝SD5961があり、これによって南北2つの区画に分割している。北半は、正殿風の東西棟建物SB6386を中央に置き、東西に二面廂付南北棟SB6173・6460およびSB6401を各2棟あて配し、さらに北方に小規模な東西棟を並べ、南方を広場的な空間とする。一方南半では、北東部に北廂付東西棟建物SB6130を正殿、南北棟建物SB6141を脇殿とした1ブロックがあるほかは全くの空地になったようだ。南半部においては、前時期までこの官衙域を特徴づけた長大な南北棟建物はなく、官衙の性格の変化したことが窺える。

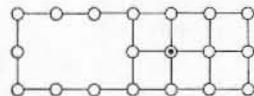
南北2区画に分割

SD5961 (PLAN 14, 17) 6ADD-L・O区

* 馬寮地域中央付近を東西に横切る素掘り溝。幅1.2m、深さ20cm前後で、東流して調査区外へ出る。西端は削平されているが、全長70m以上になる。SD5961が南北築地SA5950Bと交差する地点で木樋が検出された。長さ2.2m以上、幅35cm、厚さ3.5~4.0cmの底板および2枚の側板を組合わせたものである。この木樋底のレベルは溝底より25cmほど高いが、周囲の状況からみてSD5961に伴うことは明らかであり、築地SA5950Bを一部改修して再使用した可能性を示唆するものである。なお、溝の西端から約19m東の位置に東西に並ぶ2枚の敷石(幅1.65m、西側のものは凝灰岩切石、東側は扁平な自然石)があり、橋脚の礎石かと思われる。

SB6386 (PLAN 9; PL 13) 6ADC-H区

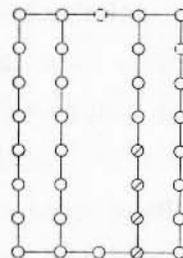
馬寮地域北半中央やや北寄りにある東西棟建物。東西17.6m(6間、10尺等間)、南北6.0m(2間、10尺等間)と規模はやや小さいが、この時期の中心建物である。柱掘形は一辺0.4~0.7mの方形状のものが多く、柱間に比べて小さい。東半3間には棟通りにも柱穴があり、床張りの可能性がある。東・西2方に建つ3棟の二面廂付南北棟建物SB6173・6460とSB6401の中心の位置を占め、また、北方の2棟の小型東西棟建物のうちSB9552の西妻と西妻を、SB6469の西妻とは東妻を揃える。第Ⅲ期の後殿SB6385の一部の柱穴を切っており、このSB6386が新しい。



中心建物

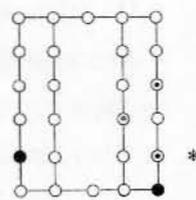
* **SB6173** (PLAN 6; PL 9) 6ADC-H区

SB6386の東南方にある二面廂付南北棟建物である。北妻柱を含め一部の柱穴は未検出だが、東西12.7m(身舎2間、10尺等間。兩廂の出11尺)、南北18.9m(7間、9尺等間)の規模である。柱掘形は、身舎東側柱筋のものが一辺1.0m、深さ0.6mと大きく、南寄りに柱抜取穴を伴うが、他はこれらより若干小さい。柱穴の切り合い関係からSB6172・6175より新しく、SB6464より古い。



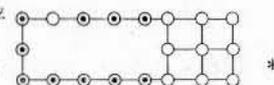
SB6460 (PLAN 6; PL 9) 6ADC-H区

SB6173の北に建つ二面廂付南北棟建物で、東西10.8m (身舎2間・両廂の出とも9尺等間)、南北13.6m (5間、9尺等間)の規模である。柱掘形は一辺0.5~0.8mの方形状で、大きさにばらつきがある。ごく一部に柱根が遺存するが、他のばあい柱痕跡さえ明瞭でない。SB6173に比して規模は小さいが、西廂柱筋を互いに揃え、またSB6173の北妻から6.0m (20尺)の位置に南妻柱筋を配しており、両者は一貫した計画のもとに建てられている。



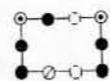
SB6469 (PLAN 8; PL 7) 6ADC-G・L区

SB6460の西北に建つ東西棟建物である。東西16.6m (7間、8尺平均)、南北4.8m (2間、8尺等間)。西4間分の柱掘形は一辺0.6~0.8m、深さ0.5mと大きさが比較的均等で柱痕跡もよく残るが、東端2間分の柱掘形は不整形で、大小の差が著しい。また、柱位置を柱穴中央に想定して東3間の柱間寸法をみると、東から2.4m (8尺)、2.7m (9尺)、1.8m (6尺)となり、西4間が2.4m (8尺)と均一なのに対して不揃いである。南側柱筋の柱穴位置もやや北寄りにすずれ。したがって、東2間は後の増築かあるいは別棟の可能性もある。柱穴の一部がSB6430と重複し、このSB6469の方が新しい。



SB9552 (PLAN 8; PL 7) 6ADC-L区

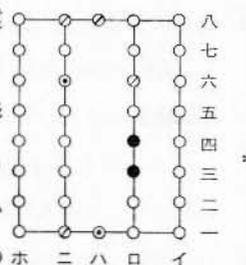
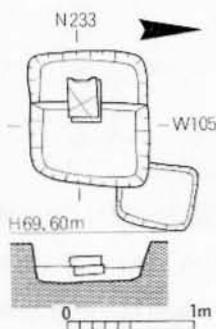
SB6469の西方にある東西棟建物。東西6.4m (3間、7尺等間)、南北4.2m (2間、7尺等間)である。柱掘形は後世の攪乱によって一部が失われているが、一辺0.5~0.8mの方形状で、深さ0.5mあり、柱根ないし柱痕跡の残るものがある。SB6469とは南北両側柱筋を共に揃える。



SB6401 (PLAN 12; PL 15) 6ADC-O区

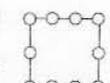
馬寮地域北半西端近くにあり、SB6137と対称をなす二面廂付南北棟建物。東西12.4m (身舎2間、10尺等間。両廂の出11尺)、南北17.0m (7間、9尺等間)である。柱掘形は一辺0.6~0.8mの方形状をなし、深さ0.5m前後で、極めて整然とならぶ。柱根は身舎東側柱筋の1本以外は遺存していないが、両廂の柱掘形底に埴を敷き礎盤とするのが特徴的である。柱穴の重複からSB6400・6403より新しい。東方に建つSB6173と北妻柱筋を揃えており、平面規模は異なるが両者は対をなす建物と考えられる。東南隅柱掘形から平城宮土器VI~VIIの土器が出土しており、建物造営の上限を知る好資料となる。

埴の礎盤



SB6453 (PLAN 9) 6ADC-M区

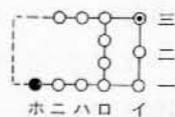
SB6469の西南、SB6386との間にある一辺5.4mの方形建物。東西は1.8m (6尺)等間の三ツ割とするが、南北は2間 (9尺等間)なので、東西棟である。柱掘形は一辺0.5~0.7mの方形状をなす。西方の東廂付建物SB6428の身舎部分と規模が等しく、柱筋も揃うので、同時期の建物と考えられる。



SB6428 (PLAN 9) 6ADC-M区

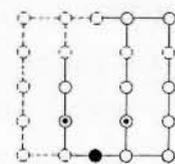
SB6453の西方、SB9552の西南にある東廂付東西棟建物。東西8.1m (身舎3間、6尺等間。廂

の出9尺), 南北5.4m (3間, 6尺等間)である。柱掘形は一辺0.5mほどの方形状で, 一部に柱根が残る。東方SB6453とは, 既述のように並存したと考えられる。



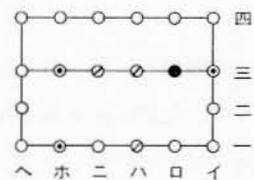
SB5945 (PLAN 18) 6ADC-N, 6ADD-O

- * 6ADC・6ADD区の境, ほぼ中央にある東廂付南北棟建物。東西8.0m (身舎2間, 8尺等間。廂の出11尺), 南北10.8m (4間, 9尺等間)である。北半部は水路にかかり未調査であるが, 北妻柱筋の一部が水路北側で検出されたため規模が確定した。南半部の柱掘形は一辺0.7mの方形状で, 整然とならぶ。身舎棟通り柱筋はるか北方の中心建物SB6386の西妻柱筋と揃う。なお, 西廂が存在した可能性もある。



SB6130 (PLAN 19; PL 31) 6ADD-O・P区

- * 馬寮域中央やや東南寄り, O・P区東寄りにある北廂付東西棟建物である。東西15.0m (5間, 10尺等間), 南北10.2m (身舎2間, 10尺等間。廂の出14尺)で, 北廂が著しく広い。柱掘形は身舎のものが一辺0.8~1.1m, 深さ0.5~0.6mで, 一部に柱根および木製礎盤が残る。北廂の柱掘形はこれらよりやや小さく, 南北に長い。棟方向は東で南に若干振れる(E2°40'S)。



身舎内東半部には, 半間毎に掘られ左右対称形に整然と並んだ11個の穴(SX6137)がある。

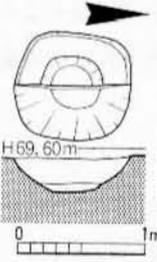
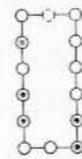
- *  いずれも平面形は径0.8m内外の円形状で, 深さ0.2~0.3mである。一部には柱痕跡らしきものがあるが柱穴とみられぬこともなく, 調査途時においては建物内に設置した棚の痕跡と考えていたが, 断ち割り調査の結果柱痕跡はみあたらず, しかも丸底となっており, 穴の配置とも考え合わせ, これらは柱穴ではなくむしろ大甕等を据え置いた痕跡と考える方が妥当であろう。この時期には, 周辺にSB6141のほかめぼしい建物がなく, このSB6130は当地域南半区画における正殿と考えられる。

Fig. 19 SX6137 断ち割り図

南半区画の正殿

- * **SB6141 (PLAN 19; PL 32) 6ADD-P区**

SB6130の西南にある南北棟建物。東西4.2m (2間, 7尺等間), 南北10.4m (5間, 7尺等間)である。柱掘形は一辺1.0m, 深さ0.5mと建物規模のわりに大きい。北妻柱は後に井戸SE6143が掘られたため失われている。棟方向が北で東に振れるが(N2°12'E), この振れはSB6130のものとはほぼ等しく, 両者の間には特に計画性は見い出



- * せないが, 配置状況からみてSB6130に伴う脇殿と考えられよう。

脇殿

SE7110 (PLAN 24; PL 35) 6ADD-Q区

- * SB6100の西側柱筋に位置する井戸。掘形が3段になる。上段は東西2.6m, 南北3.3mの長方形で深さ0.6~0.7m, 中段は上段掘形の南寄りに東西2.2m, 南北2.4mの大きさで, 深さ0.4mほど掘込む。さらにその中央西寄りに3段目の掘形を径1.0m, 深さ0.6mほどの円筒形に掘り込む。下段底部から, 曲物(径38.8cm, 高さ27.8cm)や木杭のほか, 奈良時代中頃から平安時代初めにかけての土器類や瓦片が出土した。SB6100の柱掘形は井戸の掘形によって壊されているので, SB6100廃絶後に掘られたものである。

SK6397 (PLAN 13) 6ADD-O区

O区東南にある長円形の土壇。東西1.3m, 南北1.0m, 深さ0.65m。この土壇は第IV期のSB6400の東南隅の柱穴を切って掘られるが、埋土から平城宮土器IV~Vの土器が出土した。したがって、第IV期の下限を知る資料となる。

SK6155 (PLAN 4; PL 21) 6ADC-H区

H区東南にある不整形な大土壇。東西18m以上, 南北6mあり, 最も深いところで0.9mある。北岸に護岸用の木杭が10本ほど不規則に打ち込まれている。奈良時代末期から平安時代初頭にかけての多量の土器片や木簡・瓦等が出土しているの、馬寮東官筒の西面築地は平安時代初頭頃まで存続したことがわかる。

F 宮廃絶後およびその他の遺構

前節までに取りあげた諸遺構は、相互の重複・切り合い関係や配置の状況、出土遺物等によって、時期区分がある程度可能なものであった。調査範囲内では、それら以外にも多くの建物・塀・井戸あるいは土壇などが検出されている。井戸については出土遺物から年代を想定できるものが多いが、建物や塀については時期不明とせざるを得ないものが大半である。井戸・土壇等から出土した遺物や整地土に混入した遺物の年代を総合すると、宮廃絶後から14世紀頃までのものが断続的に調査範囲内をほぼまんべんなく分布しているので、平城宮廃絶後もこの地域が利用され続けたことは明らかである。時期不明の建物・塀等の構築物のうちにはその範疇に含まれるものも少なくないと思われる。

本節においては、出土遺物から9世紀~12世紀末頃までに比定できる遺構と時期不明のものとを一括して扱うこととし、建物・塀などと区分せずに北から順に個別に記載を進めてゆく。ただし、これら諸遺構の中には、ある程度まとまりをもって存在し、その中で重複関係を示すばあいもあり、幾つかのグループに分けることも不可能ではない。これらについては「小結」の項で再度触れることにしたい。

建物はすべて第II~V期のものより規模が小さく、3間×2間程度、柱間7尺以下のものが大部分であり、また柱穴も小さい。しかしながら、9~12世紀に属する掘立柱建物遺構については従来ほとんど知られておらず、詳細な年代を比定できないとはいえ重要な意義をもつものと考えられる。

SB9553 (PLAN 8; PL 6) 6ADC-L区

馬寮域北限に第IV期に設けられた築地SA6475が廃絶した後、その上に建てられた総柱の東西棟建物。東西4.4m(2間, 柱間7尺強), 南北5.2m(西側面, 3間)~5.5m(東側面, 3間)と歪んだ平面形である。柱穴は径20cmほどの円形で、柱間寸法は一定でない。柱穴の埋土から平安時代の土器が出土しており、宮廃絶後の簡素な建物と考えられる。



SA9554 (PLAN 8; PL 6) 6ADC-L区

SB9553の南2.5mにある東西方向にならぶ柱穴列で、8.8m(4間分)を検出した。柱穴は径10~20cmと小さく、柱間も等間隔でない。SB9553に伴う塀であろう。

SK6470 (PLAN 8) 6ADC-G区

G区東南隅にある円形土壙。径2.0m、深さ0.7mである。埋土から11世紀末～12世紀初頭の瓦器（碗・皿等）が出土した。井戸の可能性もあろうが浅く、しかも井戸枠等の部材は発見されていない。

SK6509 (PLAN 8) 6ADC-M区

- * M区東北隅にあり、第IV期の二面廂付東西棟建物 SB6430の身舎東南隅柱穴を切って掘られた円形土壙。径1.5m、深さ30cmである。12世紀前半の土師器・瓦器が出土している。

SA6457 (PLAN 8) 6ADC-H・M区

H・M区境北端にある東西塀で、3間分6.3m（7尺等間）ある。柱掘形は径0.5mの円形で、東端の柱穴に柱根（径14cm）が残る。

- * **SA6508** (PLAN 5・6) 6ADC-H・M区

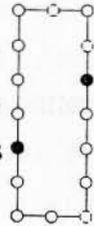
馬寮東限をなす SA 5950の廃絶後その北部に重複するように設けられた南北塀で、11間分延べ32.1mあり、全ての柱穴に柱根（径10cmほど）が残る。一辺0.3～0.7mの方形状の掘形を伴うものもあるが一部は未検出であり、柱根の下端は尖っているので、打ち込まれた可能性もある。柱間寸法は2.9～3.1mの範囲でばらつき、北でやや東に振れる（N0°58'E）。

- * **SK9560** (PLAN 8) 6ADC-M区

M区北端にあり、SB6430の身舎南側柱筋の柱穴（二へ）を壊して掘込まれた方形状の土壙。一辺約3.0m、深さ1.0mである。井戸跡の可能性もあるが、性格は不明である。

SB6429 (PLAN 8・9) 6ADC-L・M区

- * L・M区境西寄りにある南北棟建物。東西5.4m（2間、9尺等間）、南北16.2m（6間、9尺等間）で、一部の柱穴を欠く。柱掘形の大きさは不揃いで、一辺0.5～0.8mの方形状をなす。第IV期の二面廂付東西棟 SB6430と柱穴の切り合いがあり、このSB6429の方が新しい。



SB6464 (PLAN 6; PL 10) 6ADC-H区

- * SA6508の南端付近西側にあり、第II期の SB6172北半内に収まる総柱の小型建物。東西3.3m（2間、5.5尺等間）、南北3.6m（2間、6尺等間）の規模である。柱掘形も一辺0.5mの方形状と小さい。SB6177および6175を一部の柱穴が重複するものの、新旧関係は明らかでない。

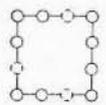


SK6194 (PLAN 6) 6ADC-H区

- * H区中央西端、SB6464の西南方にある不整形土壙。東西3.3m、南北3.1mほどで、深さは15cmと浅い。埋土から多数の土器片が出土した。

SB6171 (PLAN 10; PL 23) 6ADC-H区

- * H区西南 SB6464の南方にある南北棟建物。東西6.0m（3間、6.5尺等間）、南北6.3m（3間、7尺等間）の3間×3間だが、南北が若干長い。南北両妻柱筋の東から1間目の柱穴は未検出であるが、2間目の柱穴は梁行を三ツ割とした位置に立つので、梁行3間の建物である。柱掘形は一辺1.0mの方形状を呈する。SB6172・6173・6175と重複するが、柱穴の切り合いなく新旧関係は判断できない。



SK6413 (PLAN 9) 6ADC-M区

M区西寄り中央にある円形状の土壙。径約1.7m、深さ1.3mあり、平安時代の須恵器ほか若

干の遺物が出土した。検出状況からみて年代はさらに新しい。

SB6410 (PLAN 12) 6ADC-O区

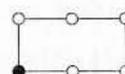
O区西北隅の西面大垣沿いにある南北棟建物で、北部は調査範囲外に出る。東西4.8m(2間, 8尺等間), 南北3.3m(2間, 6尺等間)以上。柱掘形は方形状だが、一辺0.4~0.7mとかなり大小の差がある。



*

SB6187 (PLAN 10) 6ADC-H・M区

SB6171の西北方にある2列の柱穴列。東西8.4m(2間, 14尺等間), 南北4.2m(1間, 14尺)と柱間が極めて広いため建物とするには疑問が残る。柱掘形は径0.7m前後の円形状で、柱間の割には小さい。SB6171の北妻柱筋とこの建物の南側柱筋が揃うので、両者は同時期と思われる。



*

SB6188 (PLAN 10) 6ADC-M区

SB6187のすぐ西北にある小規模な東西棟建物で、東西5.4m(3間, 6尺等間), 南北4.8m(2間, 8尺等間)あり、東妻柱は未検出。柱掘形は径0.5~0.8mの円形状。棟方向は東でやや南に振れる。



*

SA6164 (PLAN 7) 6ADC-K区

K区中央北寄りにある南北小堀で、一辺0.4~0.5mの方形状の柱穴が2.1m(7尺)~3.0m(10尺)の間隔で3間分, 延べ7.8m並ぶ。柱穴は南北溝SD6161の埋土を掘り込むので、時期は降ることになる。位置からみて、西方にある小規模な建物SB6198・6199と同時期の堀と考えられる。

*

SB6198 (PLAN 7) 6ADC-K区

K区の中央やや西寄りにある南北棟建物で、柱穴の一部は未検出であるが、東西3.3m(2間, 5.5尺等間), 南北4.5m(2間, 7.5尺等間)の小規模建物となる。柱穴は一辺0.4~0.6mの方形状のものが多い。柱穴の切り合いから第II期の南北棟建物SB5951より新しい。



*

SB6199 (PLAN 7) 6ADC-K区

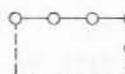
SB6198の北にある南北棟建物である。柱穴は径0.4~0.6mの円形状で一部は未検出だが、東西4.2m(2間, 7尺等間), 南北4.8m(2間, 8尺等間)の建物になると思われる。



*

SB6342 (PLAN 13) 6ADC-N・P区

N・P区境南端にあり、東西棟と推定される建物。南半は水路にかかり未発掘であるが、東西9.0m(3間, 10尺等間), 南北2.4m(1間, 8尺)以上の規模で、恐らく3間×2間程度の建物であろう。柱穴の一部がSA6341の柱穴を切っているので、これより新しいことがわかる。



*

SB5965 (PLAN 7・18) 6ADD-L区

L区北寄りにある南北棟建物で、東西は3.8m(2間, 6.5尺等間), 南北5.0m(3間, 北2間5.5尺, 南1間6.5尺)の平面になる。柱掘形は方形状のものが多いが、一辺0.5~1.0mと大きさにばらつきがある。



*

SB5968 (PLAN 18) 6ADD-L区

SB5965の西方にある建物で、東西3.0m（1間,10尺）、南北2.7m（1間,9尺）以上になる。さらに北へ延びるかと思われるが、6ADC-N区で関連する柱穴を検出していないので、最大もう1間分程度ある小規模な南北棟になろう。柱掘形は一辺0.8m前後の方形をなす。

SA5969 (PLAN 18) 6ADD-L区

- * SB5965の西方にある東西塀である。柱穴の一部は未検出であるが、一辺0.4~0.6mの方形掘形がほぼ2.1m（9尺）等間で東西に並ぶので、延べ7間、全長約19mの東西塀が想定される。位置からみてSB5965・5968と同時期と考えられる。

SB5947 (PLAN 18) 6ADD-L区

L区中央南寄りにある極めて小型の南北棟建物。東西3.6m（2間,6尺等間）、南北

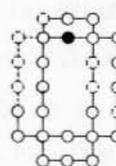
- * 2.1m（7尺）、柱掘形は径0.2~0.3mの円形状である。



SB5953 (PLAN 18; PL 26) 6ADD-L区

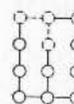
L区西南にある南北棟で、北で西に9°35'ほど振れて建つ。東西7.8m（4間,身舎・兩廂6.5尺等間,東廂8尺）、南北11.3m（6間,身舎6.5尺等間,南廂6.5尺,北廂5尺）で、隅を欠く四面廂が付く。柱穴は径0.2~0.5mと一定でないが、柱筋を正

- * しく揃える。柱穴の1つには柱根が遺存するし、また柱穴の底には河原石や埴が敷かれている。これらの柱穴の埋土は、周辺に多数分布して瓦器や羽釜片が出土する小穴群のものと類似し、また近くにSE5963・6143・6144といった平安時代末期の井戸が分布するので、これらと一連の住居跡の一つと思われる。



SB5944 (PLAN 18; PL 26) 6ADD-L区

- * SB5953の南半に重なる南北棟建物。西北部の柱穴は未検出ながら、東側柱との対応から東西4.5m（2間,7.5尺等間）、南北6.3m（3間,7尺等間）の規模が想定され、総柱となる可能性もある。柱穴は径0.4m前後と小さい。SB5953同様、平安時代の住居跡と考えられる。



SA5952 (PLAN 18) 6ADD-L・O区

- * L区西南隅からO区にかけて建つ平安時代の南北塀で、全長約8m、4間分を検出。柱穴は径0.3mほどの円形状で、柱間寸法は1.5~2.4m（5~8尺）とばらつく。

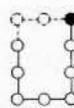
SA5948 (PLAN 18) 6ADD-O区

SA5952の南西にある東西塀。柱穴は径15~30cmと小さい、3間延べ6.7mの小塀である。柱間寸法は2.1~2.4mとばらつくが、そのうち2カ所はSB5947の柱筋に揃い両者が同時期で

- * あることを窺わせる。

SB5958 (PLAN 18) 6ADD-L・O区

SB5944の西南にある南北棟建物で、北妻柱および西北隅の柱穴は未検出であるが、東西4.2m（2間,7尺等間）、南北6.3m（3間,7尺等間）の規模になる。柱穴は径0.4mほどの円形で、東北隅柱穴には径約15cmの柱根が残る。SB5944とは棟方向を同じ



- * くするので同時期と考えられる。

SB5949・5957・6145 (PLAN 18) 6ADD-L・O・P区

いずれもSB5958の西側に建つ2間×1間の小型建物である。SB5949は東西2.1m（1間,7尺）、南北3.9m（2間,6.5尺等間）の南北棟。SB5957は東西3.6m（2間,6尺等間）、南北2.1m

(1間, 7尺)の東西棟で、これら2棟は互いに重複する。SB6145はやや南に位置し、東西1.5m(1間, 5尺), 南北3.0m(2間, 5尺等間)の南北棟である。これらの建物の柱穴からは黒色土器・瓦器・羽釜片等が出土しており、平安時代の雑舎と思われる。

SB5974 (PLAN 18) 6ADD-O区

O区北端中央にある小規模建物で、東西4.8m(2間, 8尺等間), 南北2.4m(1間, 8尺)であるが、さらに北へ延びる可能性がある。柱掘形は径0.6~0.9mの円形状である。

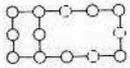
SE5963 (PLAN 18) 6ADD-O区

O区中央東寄りにある井戸。掘形は径1.6mの円形で、深さ0.7mほどある。底部は径1.1mで、中央に井戸枠に用いたと思われる長さ50cmの横棧材および曲物が部分的に残存する。出土遺物の量は少ないが、11世紀頃の黒色土器が含まれていた。

SA6126 (PLAN 22; PL 25) 6ADD-O区

O区西寄りにある逆L字型の堀。柱穴は一辺0.6mほどの方形のものが多く、2.7~3.0m(9~10尺)間隔で東西2間, 南北2間分直角に並ぶ。建物の一部の可能性もある。

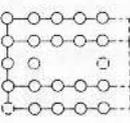
SB6131 (PLAN 19; PL 31) 6ADD-P区

P区東半にある東西棟建物である。柱穴の一部は未検出だが、東西8.2m(4間, 中央2間6尺, 両脇間7尺), 南北3.6m(2間, 6尺等間)で、西から1間目の柱通り筋に間仕切柱が立つ平面になる。柱穴は径0.2mほどと小さい。北側に建つSB6133と東側柱筋を揃えるので同時期と考えられる。

SB6132 (PLAN 20; PL 31) 6ADD-P区

SB6131のすぐ南に建つ東西棟建物である。東西6.3m(3間, 7尺等間), 南北2.1m(1間, 7尺)の規模となる。SB6131とは柱筋をほぼ揃えており、両者は柱間1間分ほどの距離を置いて建つので、同一建物である可能性もないことはない。ただ、SB6132を構成する南北両側柱筋が東で北に振れるのでここでは別棟に扱う。

SB6133 (PLAN 19; PL 31) 6ADD-P区

SB6132の北にある南北廂付東西棟建物で、柱間寸法は身舎が東西7.5m(4間, 中央2間6尺, 脇間6.5尺), 南北7.2m(4間, 6尺等間)である。柱掘形は径0.2mほどと小さい。柱穴から11世紀後半頃の土器が出土している。SB6131・6132等と同時期の平安時代の住居跡と認められよう。

SA6134 (PLAN 19・2; PL 31) 6ADD-P区

SB6131・6132と重複する南北堀。

SE6123 (PLAN 23; PL 42) 6ADD-P区

P区西北, 南北棟建物SB6120の東側柱筋に掘られた井戸。掘形平面は円形状で、上端の径3.7m。0.3mの深さまで錘状に掘り、さらに径1.5mの円形に掘り込んで遺構検出面からの深さは1mとなる。底部中央に径70cm, 成約10cmの曲物を据え置く。埋土から11世紀頃の土師器・須恵器が出土した。

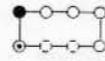
SA6079 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

SB7060の北方7.5mにある東西堀で、8.4m(4間)を検出した。掘形は径0.3mほどの円形

である。南にある建物群のいずれかの時期に北を区画した塀と考えられる。

SB6070 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

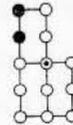
N区中央やや北寄りにある東西棟建物で、柱穴の一部は未検出であるが、東西6.3m (3間, 中央間8尺, 脇間6尺), 南北2.5m (1間, 8尺) の規模になると思われる。



- * 柱掘形は径0.6~0.7mの円形状である。棟方向は東で南に若干振れる。

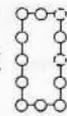
SB6074 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

SB6070の西隣にある南北棟建物である。東西2.1m (1間, 7尺), 南北8.4m (4間, 7尺) の身舎に南2間の東廂が取付く。廂の出は約2m (6.5尺) である。



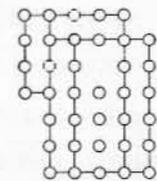
SB6075 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

- * N区中央北寄りにある南北棟建物で、東西3.0m (2間, 5尺等間), 南北7.2m (4間, 6尺等間) と小規模である。柱穴の一部は未検出である。柱掘形は一辺0.6~0.8mと柱間寸尺に比して大きい。



SB7060 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

- * SB7026の北にある建物で、廂が複雑に取付き、その点がSB7026と共通する。径0.4mほどの柱穴が東西2.0m, 南北2.1mの間隔で規則的に多数並ぶ。これらは、東西4.0m (2間, 6.5尺等間), 南北10.5m (5間, 7尺等間) の身舎に東・西・北の三面に廂が付き、西廂の北部に孫廂がつくと考えられる。廂・孫廂の出は各2.0mである。身舎内部には、棟通り筋北から2間目以南に柱穴があるので、南3間は床張りであった可能性が高い。この建物周辺の小穴群から10世紀末以降の土器が数多く出土しているのので、平安時代中頃の住宅遺構と考えられる。



SB6080 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

- * SB7060の北南に接してある南北棟建物である。東西4.8m (2間, 8尺等間), 南北5.4m (2間, 9尺等間) の小規模建物であり、一部の柱穴を検出していない。柱掘形は一辺0.5~0.7mの方形状で、深さ0.2mで一部に柱根が残る。南北中軸線を揃えるのでSB7061と同時期と推定できる。



SB7061 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

- * SB6080の南7mほどにある南北棟建物で、東西3.6m (2間, 6尺等間), 南北4.8m (2間, 8尺等間) の小規模建物である。柱掘形は著しく不揃いで、径0.3~0.8mの円形状であり、深さは約15cmと浅い。

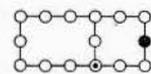


* **SE7008** (PLAN 21) 6ADD-N区

- * N区中央東寄りに設けられた井戸。掘形が円形状で二段になる。上段は径1.2m, 深さ15cm。下段はやや北寄りに径0.4m, 深さ15cmあり、中に径35cm, 高さ15cmの曲物を据えるが、井戸枠は残らない。埋土から古墳時代の土師器および奈良時代の須恵器の小片が出土した。これらからは井戸の年代を特定できないが、近隣に建つ3棟の建物SB6075・7061・6080と同時期と考える。

SB7024 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

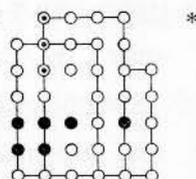
N区南端にある東西棟建物である。東西10.0m (5間, 6.5尺等間), 南北4.0m (2間, 6.5尺等間) で、東から2間目の柱通りに間仕切柱が立つ。柱掘形は一辺



0.4~0.7mの方形状だが、東端2間の柱穴はやや長方形になる。また、桁行柱間寸法は西3間が1.9m前後であるのに対して東2間は2.2m前後と広く、梁行柱間も若干広い。東2間は増築されたものと理解できよう。なお、東妻柱穴に柱根(径約15cm)が残る。

SB7026 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

SB7024と重複する位置にある南北棟建物である。東西4.2m(2間, 7尺等間), 南北10.5m(5間, 7尺等間)の身舎に、南を除く3面に廂(廂の出7尺)が付く平面が考えられ、東には孫廂がつく。東廂は北で欠けており、これはSB7027と同時存在していたためであろう。あるいは数棟の建物が連なったものである可能性も否定できず、そのばあいは平面が変わってこよう。柱穴は径0.5m前後の円形状のものが多く、底に磚を敷くばあいがある。柱根は6本残るが、最も遺存状態の良好なもので径20cm、長さ50cmと細い。西南隅柱穴から10世紀末~11世紀初頭の土器が出土しており、年代の一端を示す。

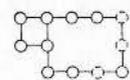


SA7056 (PLAN 21; PL 39) 6ADD-N区

SB7026とSB7060とをつなぐ南北塀で、長さ8.4m(4間)を検出した。SB7026の西側柱筋とSB7060の妻柱中央に取付く。北から2間目は柱間が狭く、他は2.2mと揃う。北から2間目が狭いのは出入口であるかもしれない。

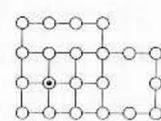
SB7027 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

SB7026の東にある東西棟建物で、柱穴の一部を欠くが、柱穴の並びから東西6.0m(3間, 約7尺等間), 南北4.4m(2間, 8尺等間)の身舎の西北に1間の張り出しのある平面が考えられる。SB7026と同時存在で、計画的に配置されたのであろう。



SB7030 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

SB7026の西南にあり、これと一部重複して建つ建物である。東西10.5m(5間, 7尺等間), 南北4.8m(2間, 8尺等間)の身舎の北面西から3間に廂が付き(廂の出2.4m, 8尺), 身舎の西3間は総柱になる。柱穴の重複関係からSB7026より古い。



SB7024・7026・7030の平面形式を比較すると、SB7024→7030→7026の順に発達しているので、建築年代もこの順とみられる。

SA7021 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

SB7024の南にある東西塀で、この建物の柱筋と揃うので同時期の存在と考えられる。全長11.2m(6間)あり、柱間寸法は不揃いである。

SA7020・7022 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

6ADD-N区西南端にある東西塀。柱穴はいずれも径20cmほどの小さな円形である。SA7020は全長15.0m(8間)あり、東で南に振れる。SA7022は全長12.9m(7間)であるが、SA7021の西延長上にあり、一連の塀の可能性はある。いずれの塀も北方に建つ平安時代後半期の建物等に関連する区画塀と考えられる。

SK7040 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

N区中央にある東西約3.0m、南北約4.0m、深さ約0.4mの不整形な土壌で、SK7041と重複し、SK7040が新しい。SK7040からは10世紀末葉の土器が出土した。

SK7041 (PLAN 21; PL 40) 6ADD-N区

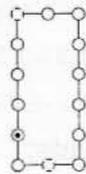
N区中央にあり、SK7040と重複する土壌であり、東西5.5m、南北7.0m、深さは南端で10cm、北端で25cmである。SK7041の埋土から、奈良末期～平安初期の土器が出土している。

SA6991・6994 (PLAN 17; PL 37) 6ADD-N, 6ADE-A区

- * 調査区東南隅、馬寮東官衙西辺にある柱穴列である。SA6991は一辺0.6～0.8mの方形状の柱穴が2.4m(8尺)間隔で2間分並んだもの。SA6994は、SA6991の北延長上10.5mの位置にあり、同様の柱穴が2.2m間隔で2間並ぶ。南の間の柱穴に径20cm、長さ40cmの柱根が残る。また両者の間には、柱根の遺存した柱穴が検出されているが、SA6991・6994との関係は明らかでない。どちらの場合もその一部を検出したに過ぎず、建物の一部、たとえば妻柱などにあ
- * たる可能性もある。

SB6115 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB6106に重複する位置にある南北棟建物で、東西4.8m(2間、8尺等間)、南北12m(5間、8尺等間)の規模である。柱掘形は方形状であるが、一辺0.4～0.8mとかなりばらつく。柱穴の切り合いからSB6108より新しい。また、SB6302およびSB6101



- * とは柱筋を揃えて建つので、同一時期と考えられる。

SB6101 (PLAN 25; PL 34) 6ADD-Q区

SB6115の西8mの位置にある南北棟建物で、東西2.7m(1間、9尺)、南北5.4m(2間、9尺等間)の規模である。柱掘形は方形状で、一辺0.4～0.8mとばらつきがある。柱穴の切り合いからSB6104より古い。



* **SB6302** (PLAN 25) 6ADD-P区

SB6101の北7mに建つ南北棟建物である。東西3.3m(2間、5.5尺等間)、南北7.8m(3間)で、桁行の柱間は北から2.1m(7尺)、2.7m(9尺)、3.0m(10尺)と一定でない。柱掘形は一辺0.5～0.7mの方形状。南妻柱筋はSB6115の北妻柱筋に揃える。



SB6108 (PLAN 25) 6ADD-P区

- * SB6115の中央東寄りに重複して建つ小型建物。東西3.0m(1間、10尺)以上、南北3.6m(2間、6尺等間)の規模が考えられる。柱掘形は一辺0.7×0.6mほどで東西に長いものが多い。柱穴の切り合いからSB6115より古い。



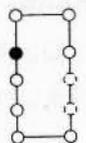
SB6106 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB3682の北西にある東西棟建物である。東西4.2m(2間、7尺等間)、南北4.1m(2間、7尺等間)で規模は小さい。柱穴は径0.4～0.6mの円形状で、柱痕跡がよく残る。北側柱中央柱穴から10世紀末以降と推定される土器が出土している。



* **SB7114** (PLAN 24) 6ADD-Q区

SB7061の西方にある南北棟建物で、東側柱筋の一部と妻柱は未検出であるが、東西4.2m(1間)、南北9.6m(4間)の規模である。西側柱筋の柱間寸法は、南から2.1m(7尺)、2.4m(8尺)、2.1m(7尺)、3.0m(10尺)とかなりばらつく。また、柱掘形も一辺0.5～0.9mと不揃いである。



SA7118 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB7100の西にある南北塀で、総長6.3m(3間、7尺等間)を検出した。SB7100の西側柱と

柱筋を揃えているので、両者は関連し合う遺構かもしれない、その場合はSB7100の平面が異な
ってこよう。

SB3678 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB7100の西にある小規模な南北棟建物である。東西3.6(1間, 12尺), 南北4.2m
(2間, 7尺等間)で、柱穴は径0.6~0.8mの円形状をなす。



*

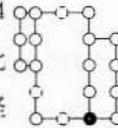
SB3682 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB3678の北約3m隔ててある南北棟建物である。柱穴の一部は未検出であるが、東
西3.0m(2間, 5尺等間), 南北5.4m(3間, 6尺等間)の平面規模となる。



SB7100 (PLAN 25; PL 33) 6ADD-Q区

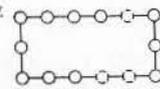
SB3678の東に建つ東西廂付南北棟建物である。身舎は東西4.2m(1間), 南北8.4
m(4間, 7尺等間)で、東側南3間の隅欠き廂(廂の出2.1m, 7尺)および西側北
2間分の小廂(廂の出1.2m, 4尺)が付く。両妻柱は未検出であるが、他の柱穴も径
0.3~0.5mと小さいので、本来妻柱があり、梁行2間であったと考えられる。西廂が南で欠け
ているのは、SB3678と同時存在していたからと考えられる。



*

SB3671 (PLAN 26; PL 33) 6ADD-Q区

西面中門の東北にある東西棟建物である。従来2列の扉と考えてきたが、『平
城宮報告IX』ではSA3671, SA3673, 柱穴の形態が類似し、柱筋も揃うので、
一棟の建物とみることに変更する。ただし、東妻柱および東西隅柱の柱穴は未検出である。東
西6.3m(3間, 7尺等間), 南北3.6m(2間, 8尺等間)の平面とみるが、さらに東方4.2mの位
置に柱穴が2個あるので、東西10.5m(5間, 7尺等間)の可能性もある。



*

SA3669 (PLAN 26; PL 33) 6ADD-Q区

SB3671の南にある東西扉で、総長12.3m(7間)を検出した。SB3671と接近しているが、
SB7024・SA7021の関係に対応するものであり、SA7021とSA3669は東西に柱筋が揃うので同
時期と考えられる。

SB6102 (PLAN 25) 6ADD-Q区

SB6101に重複する位置にある小型の南北棟建物である。柱穴に大きさのばらつきが
目立つ。東西2.7m(1間, 9尺), 南北4.8m(2間)で、桁行の柱間は等間でない。南
妻柱筋はSB6106の東側柱筋と揃うので、両建物は同時存在と推定できる。



*

SB6104 (PLAN 25) 6DD-P区

SB6101の東北部分に重複する東西棟建物である。東西5.4m(3間, 6尺等間), 南
北2.0m(1間)と小規模で、棟方向は東でかなり南に振れる。柱穴の切り合いから、
SB6101より新しい。



*

SE7094 (PLAN 26; PL 42) 6ADD-Q区

Q区南辺SB3671のすぐ東にある井戸である。掘形は一辺6.8mの方形で、深さ1.7mあり、
東北寄りに縦板組の井戸枠が残る。井戸枠は内法で方90cm, 四隅に丸杭を打ち込み隅柱とし、
各面に二段の横棧を渡し、その外側に幅15~20cmの縦板を6枚ずつ置く。板は上端が腐朽して
いたが下端から約1.5mが残存する。井戸枠の上面周囲には人頭大の河原石や瓦片を配する。
埋土は大きく二層に分けられ、主として下部の灰色砂層からは10世紀頃の土器類, 上部の黒灰

*

色粘土層からは櫛が出土した。

SK7097 (PLAN 26; PL 39) 6ADD-Q区

SE7094の東北にある長方形の土壇。東西9.6m, 南北2.1m, 深さ0.3mあり, このあたりの整地層(暗灰色土)の下から検出。埋土から9世紀後半~10世紀初頭頃の土器類が出土した。性

* 格は不明。

SE6143 (PLAN 19; PL 32・43) 6ADD-P区

P区北寄り中央にあって, SB6141 廃絶後その北妻柱位置に設けられた井戸。掘形は径約1.7mの円形状で, 西南寄りに東西80cm, 南北50cmの縦板組の井戸枠が残る。枠板のうち北側のものは一枚板であるが, 他は2~3枚を組み合わせている。枠板は暗灰色砂直上に設置され,

* 下端から約50cmが残存するが, この間に横棧等はない。底部中央には少なくとも2段の曲物を据える。上段の曲物は径50cm, 高さ15cmあり, その下に径35cm, 高さ15cm以上のやや小型の曲物を置く。井戸内埋土から10世紀末頃の土器類が出土した。なお縦板組の井戸枠周囲には, 人頭大~拳大の河原石や瓦片が分布するが, 井戸廃絶後に投棄されたものと思われる。

SE6144 (PLAN 19; PL 43) 6ADD-P区

* SE6143の北4.5mの位置にある井戸。掘形は地山である黄色砂に径1.1mの円筒形に掘られ, 深さは0.8m以上ある。中央に縦板7枚を組み合わせた径60cmの円形井戸枠を据える。板は幅15~18cm, 厚さ2~3cm, 長さ60cm以上ある。井戸枠上端は腐蝕していたが, 周縁には平瓦片を立て廻らしており, さらにその周囲に瓦を敷きつめてあった。年代決定をする手懸りになるような遺物は出土していない。

* **SE6300** (PLAN 25; PL 42) 6ADD-P区

P区西南にある井戸。掘形は径1.8mの円形で, 深さ0.8mあり, 底は灰色砂層に達する。掘形の西北寄りに横板組の井戸枠が残存し, その内底部に曲物を据えてある。井戸枠は東西77~79cm, 南北74cm, 成34cm, 厚さ3cmほどの板を突き留めにしただけの簡単なもので, 最下段のみが残存する。曲物は枠内やや北寄りにあり, 径50cm, 成11cm, 厚さ3cmほどである。

* 外は灰色砂(下層)および暗灰色砂質土(上層)で裏込めとする。なお, 井戸枠内埋土および裏込めから瓦器片が出土している。

SK6136 (PLAN 25) 6ADD-P区

P区中央部にある方形の土壇。一辺2.1m, 深さ0.4m以上ある。井戸の可能性もある。時期不明。

* **SE6135** (PLAN 25; PL 43) 6ADD-Q区

Q区西北にあり, 南北棟S B3690の廃絶後, その西側柱筋に設けられた井戸である。掘形は東西1.6m, 南北1.9m, 深さ5cmほどの浅い方形の窪みのほぼ中央にあり, 一辺1.0mの方形をなす。井戸枠は縦板組, 幅10~50cm, 厚さ2~5cmの板材を2~4枚並べ, 2段に組んだ横棧で支える構造になり, 隅柱はない。底部は未掘のため不明である。井戸内の埋土から瓦

* 器碗・羽釜などの遺物が出土した。なお, 井戸上面から多数の人頭大河原石が見つかるが, これらは井戸廃絶後に投棄されたものと思われる。

SE6146 (PLAN 25; PL 43) 6ADD-Q区

SE6135の西北に設けられた井戸。掘形は径2m, 深さ10cmほどの不整円形土壇の下から検

出された。一辺 1.5m の方形をなし、深さは 1.3m 以上あって、中央に縦板組の井戸枠を据える。井戸枠は内法一辺 1.0m あり、底部から 1.2m ほど残存する。縦板は幅 10~20cm、各辺に 5~10枚ほどを適ぎ重ね置き、内側には底および 30cm 上位に縦支柱で支持した二段の横棧を設ける。井戸底は平たい石を敷きつめ、中央に内径 40cm、高さ 40cm ほどの曲物を据える。井戸枠内埋土からは、土師器・瓦器・白磁片などが出土しており、11世紀後半には廃絶したことがわかる。

SK6110 (PLAN 25) 6ADD-Q区

Q区北西部にある円形状の大土坑。SB3690の間仕切柱を一部壊して掘られたもの。上面は径 2.4~3.0m の不整形円形だが、2段にわたって掘り込まれ、底部は掘鉢状になる。深さは検出面から約 0.8m あって、埋土から奈良時代の土器類が出土した。井戸跡の可能性もある。

SE6988 (PLAN 17; PL 42) 6ADE-A区

A区西北隅にあり、南北塀 SA5950の南端柱穴に位置する井戸。掘形は一辺 1.7m の方形で深さは北端が深く 1.1m あり、南端では 95cm と浅い。中央部に縦板組の井戸枠が残る。井戸枠は土圧でかなり歪んでいるが、四隅に木杭を打ち込んで隅柱とし、掘形底から 50cm の位置で横棧を背合わせに渡して側板を支える。側板は最も良く残る西側で 4枚である。側板の上端は腐蝕しているが、下端から平均 1m ほどが残存していた。

小 結

奈良時代以降の遺構のうちには、出土遺物や柱穴の重複関係から 9世紀~11世紀末頃に比定できる遺構があり、また柱筋が揃うもの、建物の振れの同じものを手懸りにして時期分けを考えることができる遺構がある。馬寮地域南辺部の第V期以降の遺構群は、こうした考察が可能なので、時期分けと各時期の特徴を抽出してみたい。

6ADD-N区、6ADD-Q区に集中する遺構は、

A期 SB7024, SA7021, SB7061, SB6080, SB6075, SB6070, SB3671, SA3669, SB7114
SK7041

B期 SB7030, SB6074, SK3682, SA7118

C期 SB7026, SB7027, SK7040, SB7060, SB7100, SB3678, SB6102, SB6106

に分かれる。A期に属する建物は、奈良時代の遺構に比べれば柱穴は一回り小さい 70~80cm であるが、B期に属する遺構に比べれば一回り大きい。また建物は梁行 2間か 1間で身舎のみの廂の付かない簡単な建物が多い。建物はB期以降のように振れずに、ほぼ平城方位と合致し、この点もB期以降と性格を異にする。B期は建物密度が薄くなり、平城方位に対してわずかに東や西に振れる。SB7030・6074のように片廂を付けるものが出てくる。C期の建物は平城方位に対して北で東に約 12度振れている。また SB7026・7060・7100のように廂の取付き方が複雑で規模の大きい建物がある。これらの一群の中では大型の建物は、それぞれの区画の中心建物として機能していたのであろう。また SB7026や SB7100は近接する同時存在の付属建物のために隅を欠いており、建物群を複雑に、しかし計画的に配置していたことがわかる。

G 西面大垣 SA 1600 と西一坊大路 SF 154

馬寮地域においては、第51次調査において西面大垣 SA1600の基壇東縁部と思われる土壇を一部検出している。高さ約30cmで、大半は灰褐色砂質土からなり、上部の約5cmが黄色砂質土である。基壇の東端部幅1m強を長さ11m余にわたって検出したに過ぎず、したがって築垣本体

- * には調査が及んでいないが、玉手門心および佐伯門推定心を参考に多少の振れを考慮すると、大垣心の座標はW111~112の間に想定される。第133次調査で検出した南面西門(若犬養門 SB 10200)から西面大垣心までの計画寸法は820尺であるから、1尺=0.295mとすれば241.9m西方、すなわちW111.0が大垣心となり(1尺=0.296では242.7m西、W111.8)、先の想定と違わない結果を得られる。SA1600の基壇東端はW108.3あたりにあり、これらから復原される基壇
- * 幅は5.4~7mということになる。

第103-14次調査²⁾においては、佐伯門のすぐ北方において西一坊大路とその両側溝を検出している。東側溝 SD152³⁾は幅3.8~5.6m、深さ0.5~0.8mの素掘り溝である。粘土と砂が交互に堆積し、大きく3層に分れる。上層からは8世紀後半の須恵器壺・杯が、中層からは須恵器片のほか軒丸瓦6308型式と6316型式が各1点、平瓦片数点が出土した。西側溝 SD153は幅1.5~

- * 2.0m、深さ0.2mで、埋土は一樣な砂質土である。溝中からは8世紀後半の須恵器杯が出土した。これらの溝間が西一坊大路 SF154で、路面幅は20.2~20.8m、側溝心距離は24.0mとなり、80尺(8丈)の大路幅員が想定される。また、大垣推定心から東側溝東肩までは約11mあるが、これから大垣基底幅の1/2すなわち4.5尺を引いた9.7m(33尺)ほどが塙地の幅となる。なお、条坊計画線は大垣心から西へ80尺、すなわちW135.3のあたりにあったことになり、
- * これは西一坊大路の中心ではなく、5尺西へ寄る。第32次・39次調査で明らかにされている東一坊大路と比較すると、側溝心距離が8丈であること、宮域に近い方の側溝の規模がより大きいこと、大路と宮大垣との間の塙地の幅が約10mであること、以上の諸点では共通する。しかし、東一坊大路西側溝の幅8尺に対して西一坊大路東側溝の幅は16尺前後で2倍の広さとなり、西一坊大路西側溝の幅も約6尺で東一坊大路東側溝幅4尺よりも広い。

- * ところで、西面大垣については以上のほかに第88-1、88-13次調査によって、小規模ながらも発掘をおこなっている。どちらも馬寮地域西北方の西面大垣推定線上における個人住宅の建設に伴う事前調査として実施したもので、小面積のため確たる成果を挙げ得なかったが、第88-1次調査においては大垣基壇の一部と思われる遺構を検出しているので併せて報告しておこう。

調査範囲は東西20m、南北4mで、近世には墓地であつたらしく、3個の蔵骨器および埋葬

- * 用土壇と思われるものを発見している。これらの土壇等が奈良時代の遺構を攪乱していたが、調査地の西寄り、東西幅約6mで南北にのびる基壇状遺構を検出した。地山上に約40cm程度の盛土をしたもので、その東西には大量の瓦片が散乱している(軒平瓦6641型式・6727型式各1点を含む)ため、大垣基壇と考えた。この基壇を挟んで東西両側に南北方向の溝がある。西側の

1) 『年報1982』p.9~10。

2) 『昭和52年度平城宮概報』p.31~33。

3) 平城宮外の遺構に関しては、宮とは別個に、

左京側と右京側に分けてそれぞれ独自の遺構番号を付与している。

4) 『昭和49年度平城宮概報』p.21。

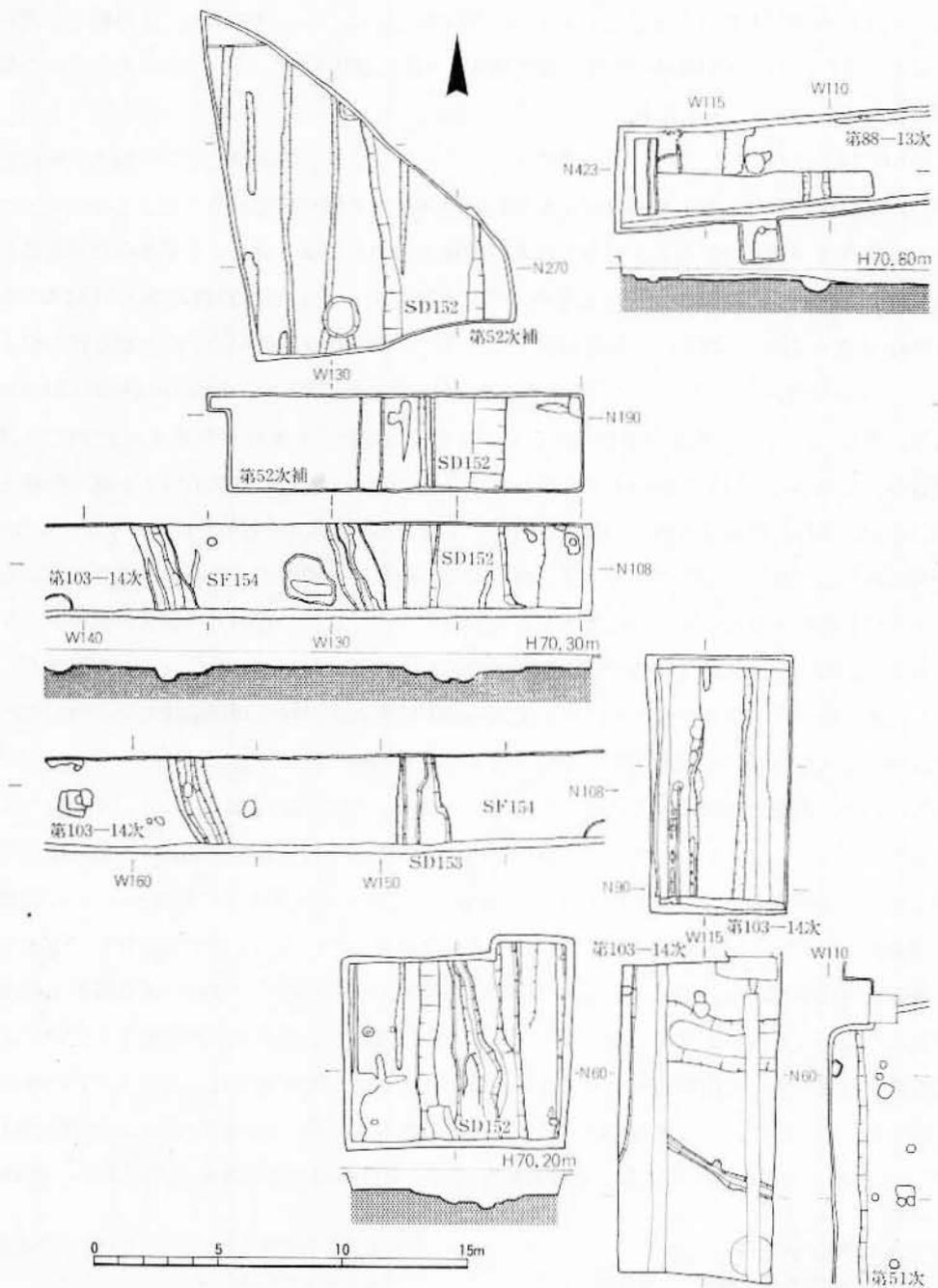


Fig. 20 西一坊大路関係の遺構

ものは基壇の西方1 mに、東側の溝は約3 m離れて位置する。西のものは雨落溝の可能性がある。基壇盛土を除去して下層の南北溝を検出している。この溝は盛土の東縁下に位置するため、平城宮造営時のものと考えられた。

- 大垣基壇と考えた盛土の範囲はW110からW116に及び、その幅約6 mで先の第51次調査の成果と矛盾しない。しかし、基壇の心はW113付近にあることとなり、2 mほど西に偏する。約360mほど北方にあたるため振れを考慮しなければならないが、振れは20'ほどあり大き過ぎる。ただ、大垣本体が基壇の東寄りに構築されたとみれば許容されるところではある。いずれにしても基壇外西方1 mにある南北溝を雨落溝とみるのは妥当でない。下層で検出され造営時のものとみた南北溝はW111～112の間にその中心がある。大垣推定心と一致するため地割溝の可能性が強いが、断定はできない。